

筑後西部第2地区遺跡群（I）

福岡県筑後市大字津島所在
県営担い手育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
筑後市文化財調査報告書
第21集

1999

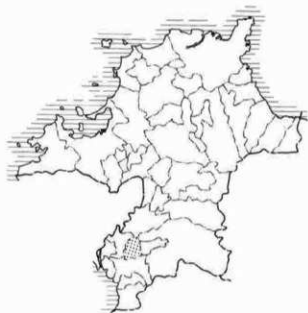
筑後市教育委員会

筑後西部第2地区遺跡群（I）

福岡県筑後市大字津島所在

県営担い手育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

- ・津島南佛生遺跡
（第1・第2次調査）
- ・津島南笹原遺跡
- ・津島北石伏遺跡



1999

筑後市教育委員会

序

筑後川と矢部川に挟まれる筑後平野の中央に位置する筑後市域は、古代より水稻耕作の適地として開墾が進み、また交通の要衝として多くの人々が往来することにより、歴史を刻んできました。

筑後西部第2地区遺跡群の発掘調査は、県営担い手育成基盤整備事業に伴い、平成8年度より福岡県筑後川水系農地開発事務所の委託を受け、実施したものであります。

この度報告する津島遺跡群は筑後市の南部に位置し、これまで知られていなかった弥生時代後期から古墳時代初めにかけての遺跡の分布することが確認されました。これらの調査は、この地域の歴史を考える上で、重要な手掛かりとなるものと考えられます。

発掘調査から報告書作成に至るまで、福岡県筑後川水系農地開発事務所の関係者、関係機関、工事関係者、各位に多大なご協力とご援助を頂きました。ここに心から感謝を表する次第であります。

本書が文化財保護の理解を深める一助となり、合わせて研究資料としてご活用いただければ幸いです。

平成11年3月

筑後市教育委員会

教育長 牟田口 和 良

例 言

1. 本書は、県営担い手育成基盤事業西部第2地区に伴い、福岡県筑後川水系農地開発事務所の依頼を受けて、筑後市教育委員会が平成8、9年度に大字津島において実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 本書使用の遺構実測図は、永見秀徳、小林勇作、立石真二、江崎貴浩、末吉貴弥、奥村太郎が作成し、浄書は小林、立石が行った。
3. 本書使用の遺物実測図は、立石真二、平塚あけみ、江藤玲子が作成し、浄書は、立石が行った。
4. 本書使用の写真は永見秀徳、小林勇作、立石真二が撮影した。なお、遺跡の気球写真は空中写真企画に依頼した。
5. 本書使用の標高は海拔高であり、方位はG、Nである。
6. 本書の執筆は第3章第1節を小林勇作が執筆し、その他を立石真二が執筆した。編集は立石が行った。
7. 本書に掲載した遺物の縮尺は土製品、木製品は1/3、石製品は1/2を基本とする。
8. 本書に掲載した遺構の縮尺は1/40を基本とする。また遺構の呼称は竪穴住居をSC、掘立柱建物跡をSB、溝状遺構をSD、土壇をSK、柱穴をSP、性格不明のものをSXと記号化した。
9. 本書に関わる図面、写真、遺物等の資料は、筑後市教育委員会で保管・管理される予定である。

本文目次

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経過	3
2. 調査体制	4
第2章 位置と環境	7
第3章 遺構と遺物	11
第1節 津島南佛生遺跡第1次調査	13
1. 調査概要	15
2. 検出遺構	15
3. 小結	15
第2節 津島南佛生遺跡第2次調査	17
1. 調査概要	23
2. 西側部分の調査	23
3. 東側部分の調査	24
4. 小結	45
第3節 津島南笹原遺跡の調査	47
1. 調査概要	51
2. 遺構と遺物	51
3. 小結	62
第4節 津島北石伏遺跡の調査	63
1. 調査概要	67
2. 遺構と遺物	67
3. 小結	77
第4章 考察	81
1. 周辺遺跡の状況	83
2. 各遺跡の概要	85
3. 結び	87

挿 図 目 次

Fig. 1. 泉宮担い手育成基盤整備事業筑後西部第2地区計画概要(1/16,000)	6
Fig. 2. 津島遺跡周辺の遺跡分布図(1/25,000)	9
Fig. 3. 津島遺跡群周辺地形図(1/2,500)	10
Fig. 4. 基本土層模式図	15

Fig. 5. 津島南佛生遺跡第1次調査遺構全体実測図 (1/80)	16
Fig. 6. 津島南佛生遺跡第2次調査区全体図 (1) (1/80)	20
Fig. 7. 津島南佛生遺跡第2次調査区全体図 (2) (1/80)	21
Fig. 8. SX106 (1/40)	23
Fig. 9. SK002・004・006 (1/40)	24
Fig. 10. SK007・009 (1/40)	25
Fig. 11. SK007・009出土遺物 (1/3)	26
Fig. 12. SK011・012・013 (1/40)	27
Fig. 13. SK014・016 (1/40)	28
Fig. 14. SK011・013・014・016出土遺物 (1/3)	28
Fig. 15. SK017 (1/40)	29
Fig. 16. SK017出土遺物 (1/3)	30
Fig. 17. SK018 (1/40)	31
Fig. 18. SK018出土遺物 (1/3)	32
Fig. 19. SK019・020・021・022・023 (1/40)	33
Fig. 20. SK019・020・022・023出土遺物 (1/3)	34
Fig. 21. SK024・026・027 (1/40)	35
Fig. 22. SK024・026出土遺物 (1/3)	35
Fig. 23. SK028・029・030・031・032 (1/40)	36
Fig. 24. SK029・031・032出土遺物 (1/3)	37
Fig. 25. SK034・035・036・037 (1/40)	38
Fig. 26. SK035出土遺物 (1/3)	39
Fig. 27. SK038・039 (1/40)	40
Fig. 28. SK038・039出土遺物 (1/3)	40
Fig. 29. SK040・041・042・043・044・046 (1/40)	42
Fig. 30. 出土木製品 (1/3)	43
Fig. 31. その他の出土遺物 (1/3)	44
Fig. 32. 土器出土遺構模式図 (1/200)	45
Fig. 33. 津島南笹原遺跡全体図 (1/80)	49
Fig. 34. SK001及び出土遺物 (1/40, 1/3)	51
Fig. 35. SK002 (1/40)	52
Fig. 36. SK003及び出土遺物 (1/40, 1/3)	52
Fig. 37. SK006・031及び出土遺物 (1/40, 1/3)	53
Fig. 38. SK007・009・011・012・013・014 (1/40)	55
Fig. 39. SK009・013・014出土遺物 (1/3)	55
Fig. 40. SK015・016・017・018・019・020 (1/40)	56
Fig. 41. SK015・016・017・018・020出土遺物 (1/3)	57
Fig. 42. SK021・022・023・024 (1/40)	58
Fig. 43. SK025・026・027・028 (1/40)	59
Fig. 44. SP005及び出土遺物 (1/40, 1/3)	61

Fig.45. その他の出土遺物 (1/3, 1/2)	61
Fig.46. 津島北石伏遺跡全体図 (1/80)	65
Fig.47. SC01 (1/40)	67
Fig.48. SB02 (1/40)	68
Fig.49. SC01・SB02出土遺物 (1/3)	69
Fig.50. SX05 (1/40)	70
Fig.51. SX05Ⅱ層出土遺物 (1) (1/3)	71
Fig.52. SX05Ⅱ層出土遺物 (2) (1/3)	72
Fig.53. SX05Ⅲ,Ⅳ層出土遺物 (1/3)	73
Fig.54. SX05出土遺物 (1/3)	74
Fig.55. SX10 (1/40)	75
Fig.56. SX10出土遺物 (1/3)	75
Fig.57. その他の出土遺物 (1/3, 1/2)	76
Fig.58. 筑後市内周溝状遺構調査地点図 (1/50,000)	78
Fig.59. 筑後市南部時代別遺跡分布図 (1/25,000)	84
Fig.60. 梅島遺跡主要部分概略図 (1/300)	86
Fig.61. 津島皿ヶ町遺跡遺構概略図 (1/250)	87

図 版 目 次

PL. 1

津島南佛生遺跡第1次調査全景 (西から)

SD1土層断面 (西から)

SD1土層断面 (北から)

PL. 2

津島南佛生遺跡第2次調査・

津島南笹原遺跡全景 (上から)

津島南佛生遺跡第2次調査・

西側調査区 (北から)

PL. 3

SD103 (北東から)

SX106 (東から)

PL. 4

津島南佛生遺跡第2次調査・

東側部分調査区 (上から)

津島南佛生遺跡第2次調査区・

廃棄土壌群 (上から)

SK002 (北から)

PL. 5

SK004・014・027・043完掘状況

(南東から)

SK007完掘状況 (南から)

PL. 6

SK006土層断面 (北から)

SK006完掘状況 (北から)

PL. 7

SK011土層断面 (西から)

SK011完掘状況 (南西から)

PL. 8

SK012土層断面 (東から)

SK012完掘状況(北から)
PL. 9
SK013土層断面(東から)
SK013・034完掘状況(北から)
PL. 10
SK014土層断面(西から)
SK014・043完掘状況(南から)
PL. 11
SK016土層断面(東から)
SK016完掘状況(南東から)
PL. 12
SK017遺物出土状況(東から)
SK017完掘状況(北東から)
PL. 13
SK015土層断面(北から)
SK018完掘状況(北から)
PL. 14
SK019土層断面(北から)
SK020土層断面(北から)
PL. 15
SK021土層断面(北西から)
SK019・020・021完掘状況
(北から)
PL. 16
SK023遺物出土状況(南から)
SK023完掘状況(北西から)
PL. 17
SK022土層断面(北東から)
SK028・029・030・040
完掘状況(北から)
PL. 18
SK024土層断面(北から)
SK024完掘状況(北東から)
PL. 19
SK035完掘状況(南から)
SK036完掘状況(東から)
PL. 20
廃棄土壌出土遺物(1)
PL. 21
廃棄土壌出土遺物(2)

PL. 22
廃棄土壌出土遺物(3)
PL. 23
廃棄土壌出土遺物(4)
その他の出土遺物
PL. 24
津島南笹原遺跡全景(西から)
津島南笹原遺跡廃棄土壌群(上から)
PL. 25
SK001遺物出土状況(西から)
SK002完掘状況(北から)
PL. 26
SK003土層断面(北から)
SK003完掘状況(北から)
PL. 27
SP005完掘状況(北から)
SP005遺物出土状況(南から)
PL. 28
廃棄土壌群1(北から)
廃棄土壌群2(北から)
PL. 29
廃棄土壌群3(北から)
廃棄土壌群4(北西から)
PL. 30
廃棄土壌出土遺物(1)
PL. 31
廃棄土壌出土遺物(2)
SP005出土遺物
PL. 32
津島北石伏遺跡全景(東から)
SC01完掘状況(南東から)
PL. 33
SB02完掘状況(南西から)
SX05完掘状況(南西から)
PL. 34
SB02土層断面(P11・南から)
SB02土層断面(P12・南から)
PL. 35
SB02土層断面(P15・北から)
SB02土層断面(P16・北から)

PL. 36

SX05 北側土層断面 (西から)

SX05 西側土層断面 (南から)

PL. 37

SX05 南側土層断面 (西から)

SX05 東側土層断面 (南から)

P.L 38

SX10 完掘状況 (南東から)

SD20 完掘状況 (北から)

PL. 39

SX05 II層出土遺物

SX05 III層出土遺物 (1)

PL. 40

SX05 III層出土遺物 (2)

SX05 IV層出土遺物

SX05 出土遺物

SX10 出土遺物

第1章 はじめに

第1章 はじめに

1 調査に至る経過

筑後市西南部は矢部川により形成された低位段丘と沖積平野が広がり、農業を中心とした産業が営まれている。この地域は稲、麦を中心とした二毛作が行われる穀倉地帯であったが、近年の農業構造の変化に伴い蔬菜ハウス園芸が導入され、農業経営の多様化が進んでいる。しかし、この地域特有の用排兼用のクリークが迷走するため圃場の地下水位が高く排水不良なこと、道路も狭小かつ未整備で農業機械の導入が困難な状況のままであった。

そのため農業の近代化、合理化による農業所得の増大を目的として、県営担い手育成基盤整備事業筑後西部第2地区計画が福岡県筑後川水系農地開発事務所（以後「甲」とする）により行われることとなった。事業は平成6年に全体計画が実施され、平成7年に県営事業として採択された。対象地区は筑後市大字常用、津島、志、尾島、山門郡瀬高町本郷を含み、対象面積は157haである。

平成7年、甲より埋蔵文化財に関する申請が筑後市教育委員会（以後「乙」とする）にあり、乙は平成8年6月より8年度事業対象地域において、麦の収穫後、削平を受ける部分に対し試掘調査を行い、文化財の埋蔵地に関しては甲、乙両者の協議ののち、発掘調査を実施した。試掘調査と発掘調査は平行して行われた。調査は常用日田行2次地点の遅れのため、平成9年5月に終了した。

平成9年4月、甲より乙に対し、9年度事業対象地域（8・9・10・11・12・13工区、津島・志・常用・尾島地区）での埋蔵文化財の試掘調査依頼があり、乙は道路、水路部分及び削平を受ける部分について試掘可能な地点から随時これを行った。その結果、文化財の埋蔵地に関して甲、乙は予算、日程などを協議し、発掘調査を行った。途中、津島北石伏遺跡、津島皿ヶ町遺跡の調査の遅れから日程を再度協議し、平成10年4月に調査を終了した。

西部第2地区は平成8年度から調査が行われており、平成11年度まで事業が行われる予定である。また、平成10年3月末までに調査を実施した地点は以下の表の通りである。

（平成8年度）

調査区名	調査期間	時代	備考
津島南佛生1次	1996年7月～1996年7月	中世	今回報告（3章1節）
常用日田行1次	1996年9月～1996年12月	弥生（集落）	
常用北長田1次	1996年12月～1996年12月	弥生・中世	
常用日田行2次	1997年12月～1997年3月	弥生	
常用北長田2次	1997年1月～1997年5月	弥生・中世	

(平成9年度)

調査区名	調査期間	時代	備考
津島北石伏	1997年7月～1997年9月	弥生後期	今回報告(3章4節)
津島皿ヶ町	1997年9月～1997年10月	弥生後期	
津島南佛生2次	1997年10月～1997年10月	弥生～古墳	今回報告(3章2節)
津島南笹原	1997年10月～1997年11月	弥生～古墳	今回報告(3章3節)
常用相割	1997年10月～1997年10月		
常用野々下	1997年10月～1997年10月		
志野添	1997年10月～1997年11月	縄文～近世	
志西野々	1997年11月～1997年12月	縄文早期	
志前田	1997年11月～1998年3月	縄文早期	
志上婦計1次	1997年11月～1997年12月	弥生～近世	
志下婦計1次	1997年12月～1997年12月	近世	
常用野中	1997年12月～1997年12月		
志上婦計2次	1998年1月～1998年2月	弥生～近世	
尾島下町裏	1998年1月～1998年1月	中世(道路)	
志下婦計2次	1998年1月～1998年2月	近世	
尾島前田	1998年3月～1998年4月	中世	
尾島東婦計	1998年3月～1998年3月	縄文～近世	
志西田	1998年3月～1998年3月	縄文・近世	

2 調査体制

各年度の調査組織の体制は以下の通りである。

(平成8年度)

調査主体	筑後市教育委員会			
教育長	森田 基之			
教育部長	津留 忠義			
社会教育課長	山口 逸郎			
社会教育係長	本村 正晴			
	永見 秀徳	小林 勇作	田中 剛	柴田 剛(嘱託)
調査補助	野田 洋子			
調査作業	地元有志			
整理作業	平塚 あけみ(整理補助員)	江藤 玲子	野間口 靖子	
	馬場 敦子	湊 まど香		
調査・整理作業協力	江崎 貴浩	奥村 太郎	末吉 隆弥	

《平成9年度》

調査主体	筑後市教育委員会					
教育長	森田 基之					
教育部長	津留 忠義					
社会教育課長	山口 逸郎					
社会教育係長	田中 清通					
	永見 秀徳	小林 勇作	田中 剛	上村 英士		
	(平成9年6月～)					
嘱託	柴田 剛	上村 英士	(平成9年5月)	立石 真二	(同8月～)	
調査作業	地元有志					
整理作業	平塚 あけみ	(整理補助員)	江藤 玲子	野間口 靖子		
	馬場 敦子	湊 まど香				
調査・整理作業協力	江崎 貴浩	奥村 太郎	末吉 隆弥			

《平成10年度》

調査主体	筑後市教育委員会					
教育長	幸田口 和良					
教育部長	下川 雅晴					
社会教育課長	山口 逸郎					
社会教育係長	田中 清通					
	永見 秀徳	小林 勇作	田中 剛	上村 英士		
嘱託	柴田 剛	立石 真二				
調査作業	地元有志					
整理補助員	平塚 あけみ	江藤 玲子				
整理作業	野口 晴香	野間口 靖子	馬場 敦子	湯川 琴美		
調査・整理作業協力	奥村 太郎	末吉 隆弥				

なお、今回報告の遺跡の調査、整理作業に関して下記の方々の御教示、御指導を賜った。記して謝意を表したい。(順不同、敬称略)

新原 正典、小田 和利(福岡県教育庁南筑後教育事務所)、井上 裕弘(福岡県教育委員会)、横山 邦継(福岡市埋蔵文化財センター)、石井 扶美子(夜須町教育委員会)、田中 康信(瀬高町教育委員会)、山田 元樹(大牟田市教育委員会)、大塚 孝治(八女市教育委員会)、岡部 裕俊(前原市教育委員会)、久住 猛雄(福岡市教育委員会)

第2章 位置と環境

第2章 位置と環境

筑後市は福岡県の西南部、筑後平野の中央部に位置する。北は久留米市・三瀬郡三瀬町、東は八女市・八女郡広川町、西は三瀬郡大木町、南は山門郡瀬高町・三橋町に隣接する。

筑後市の北部には、耳納山地より派生した八女丘陵が東西方向に走っている。この丘陵を最頂部として、市の中央部から東部には中位から低位段丘が広がる。一方、市の南部には一級河川の矢部川が西流し、この堆積により形成された扇状低湿地が広がる。市の西部は5 m以下の三角州状低湿地で、クリークが発達している。

津島遺跡群は市の南部、矢部川の形成した低位段丘上に展開する、弥生時代から古墳時代を中心とした複合遺跡である。周辺には縄文時代晩期から弥生時代の遺跡である常用遺跡、水田遺跡が知られている。また近年の調査により、東側の志地区には縄文時代早期の遺跡の存在が知られるようになった。これらは尾島地区を通り、東側の鶴田地区へと広がっている。津島地区に隣接する瀬高町本郷作出地区からは、弥生後期の周溝状遺構が発見されている。また矢部川の南岸にも、弥生から古墳時代にかけての遺跡が存在している。



- | | | | | |
|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 1 津島南発生遺跡 | 2 津島南笹原遺跡 | 3 津島北石伏遺跡 | 4 津島畑ヶ町遺跡 | 5 古島島相遺跡 |
| 6 下北島燈台遺跡 | 7 水田天満宮 | 8 柳島遺跡 | 9 上北島遺跡 | 10 扇洗遺跡 |
| 11 平富石ドルメン墓 | 12 水田杉ノ元遺跡 | 13 山伏遺跡 | 14 常用遺跡 | 15 常用日田行遺跡 |
| 16 常用北長田遺跡 | 17 平塚遺跡 | 18 廣山遺跡 | 19 鶴田市ノ塚遺跡 | 20 鶴田岸浜遺跡 |
| 21 鶴田前島遺跡 | 22 鶴田橋原遺跡 | 23 志八反田遺跡 | 24 志野浜遺跡 | 25 志上編計遺跡1次 |
| 26 志東編計遺跡 | 27 志下編計遺跡1次 | 28 志下編計遺跡2次 | 29 常用野中遺跡 | 30 常用野中遺跡 |
| 31 志西野々遺跡 | 32 志前田遺跡 | 33 尾島下町裏遺跡 | 34 尾島東編計遺跡 | 35 尾島前田遺跡 |
| 36 常用相刺遺跡 | 37 常用野々下遺跡 | 38 常用ニラヶ遺跡 | 26 志上編計遺跡2次 | |

Fig. 2 津島遺跡周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

今回実施した調査は圃場整備事業に伴い掘削される地点のみを行った。すべてが水路による削平部分である。調査範囲は狭いものとなり、遺跡の全体像をとらえるには至らなかった。南佛生地区からは1次調査で中世と思われる溝が、2次調査とこれの東に隣接する笹原地区からは、古墳時代初期の廃棄土壌が検出された。一方、南に位置する北石伏地区からは弥生時代後期の周溝状遺構等が検出された。



Fig. 3 周辺地形図 (1/2,500)

注 常用遺跡、志遺跡、額田遺跡については近年の発掘成果である。現在整理作業中の部分もあり、報告書は近年中に刊行の予定である。
 藤高町本郷作出地区については藤高町教育委員会田中康信氏の御教示による。

(参考文献)

- 筑後市史編さん委員会 編 『筑後市史』 1997
- 岩崎 光 『葛山遺跡』 筑後市文化財報告書 1966
- 小田 富士雄 『狐塚遺跡』 筑後市文化財調査報告書 1970
- 筑後市教育委員会 編 『鶴島遺跡』 筑後市文化財調査報告書 1992
- 筑後市教育委員会 編 『筑後東部地区遺跡群Ⅰ』 筑後市文化財調査報告書 第11集 1994
- 筑後市教育委員会 編 『筑後東部地区遺跡群Ⅱ』 筑後市文化財調査報告書 第12集 1995

第3章 遺構と遺物

津島南佛生遺跡 第1次調査

第1節 津島南佛生遺跡 第1次調査

1. 調査概要 (Fig. 3)

当遺跡は標高6.7m位の低位段丘上に位置し、調査前は米や麦などの水田として活用されていた。この地区の発掘調査は、主として工事によって掘削・削平の及ぶ範囲で、確認調査によって遺跡の存在が認められた部分について実施することになった。

津島南佛生遺跡第1次調査は、平成8年度に筑後西部第2地区県営担い手育成基盤整備事業に係る第22号排水路の工事に伴い、筑後市教育委員会が事前に実施したものである。当遺跡の調査は平成8年7月に実施し、対象面積は85㎡である。調査は始め、重機によって遺構面を確認した。その結果、表面から淡黒茶色土(表土)、淡茶灰色粘質土(包含層)を除去(約0.70m)すると遺構面である乳灰褐色粘土が現れ、東西に延びる溝1条を検出した。

2. 検出遺構

SD1 (Fig. 4・5)

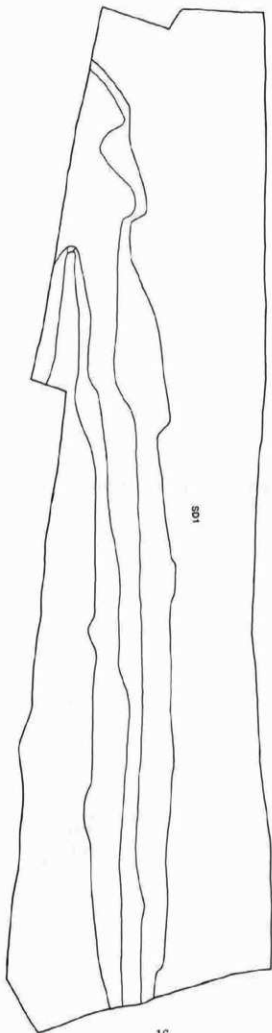
東西方向に延びる溝を約20.00m検出した。溝の西側はやや南方向に蛇行し、現況水路に切られているものであった。溝の幅は1.20m～1.90m、深さは0.25m～0.29mを測る。溝の堆積土は上層から淡茶灰色粘質土→淡茶灰色粘質土(乳灰褐色ブロックと砂粒が多く混合する)であった。出土遺物は皆無であった。

3. 小結

調査によって確認された遺構は溝1条で、出土遺物は皆無であったため、時期については不明であるが、確認調査実施時に包含層から龍泉窯系青磁碗(横田・森田編年I-5b)の破片を認めた。今後の周辺調査が待たれる結果となった。



Fig. 4 基本土層模式図



S01



Fig. 5 津島雨森生道跡第1次調査 遺構全体実測図 (S = 1/80)

津島南佛生遺跡 第2次調査

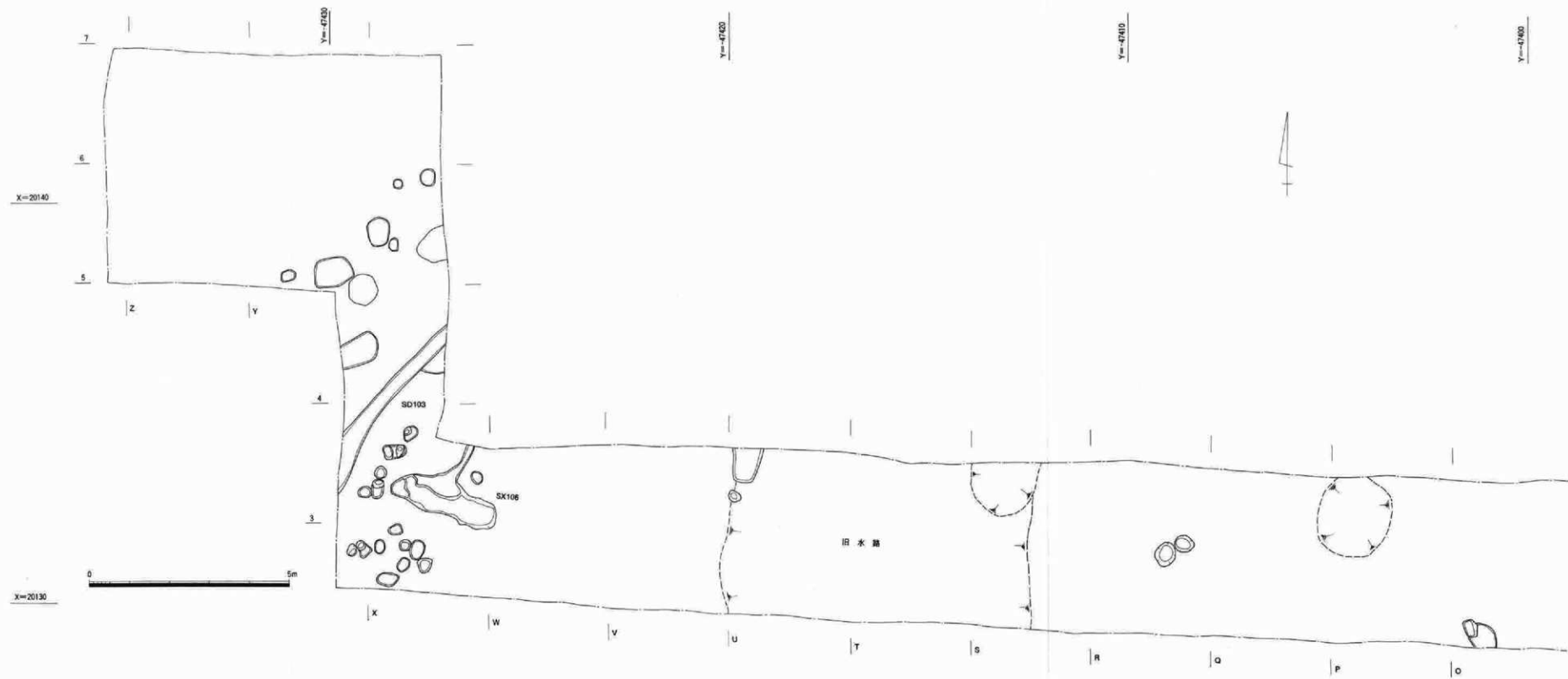


Fig. 6. 津島雨佛生遺跡第2次調査区全体図(1) (1/80)

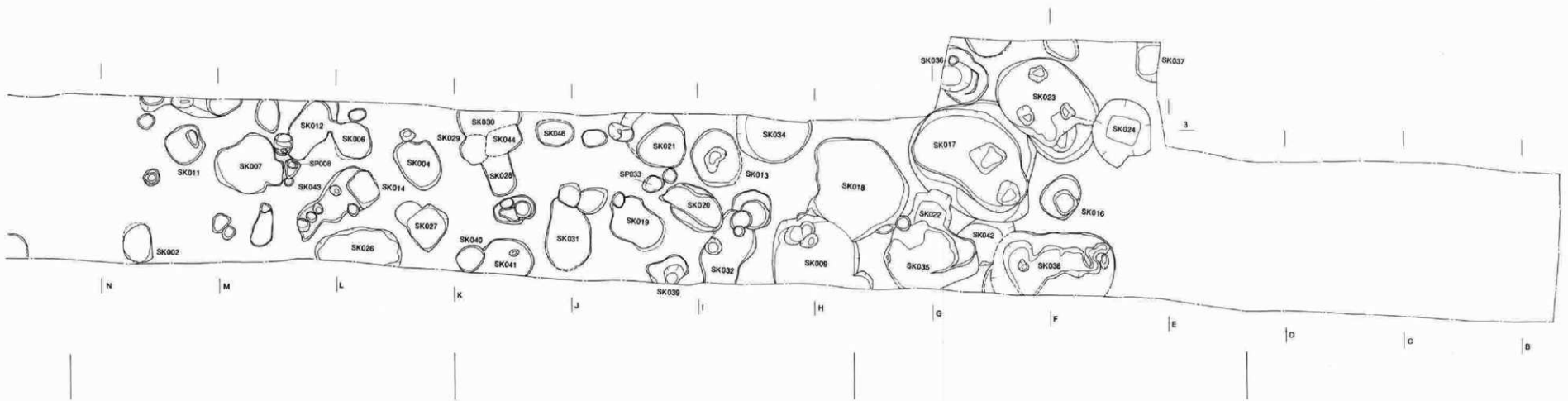
Y=47600

Y=47300

Y=47000

Y=47700

X=20140



X=20130

Fig. 7. 津島南佛生遺跡第2次調査区全体図(2) (1/80)

第2節 津島南佛生遺跡 第2次調査

1. 調査概要 (Fig.6・7)

2次調査区は、1次調査区の東側約7mに位置する。第22号支線排水路及び揚水ポンプ場の建設に伴い、調査が行われた。調査区は東西に68mを測り、調査対象面積は500㎡である。

調査区の地山は東と西で大きく異なっている。西側は黄褐色のロームであり、時期不明の遺構が掘り込まれている。ローム土は途中、S～Tグリット部分で旧水路である礫床となるが、Nグリットまで続く。N～Eグリットまでは石灰色粘土が地山となり、多くの遺構がこの間に掘り込まれている。Eグリットより東側は再び黄褐色ローム土の地山で、調査区の外側で谷地形となり落ち込み始める。遺構の多くが軟質な粘土基盤にあり、検出も容易でなかったことから調査は困難をきわめた。

調査期間は1997年10月3日から10月30日までであり、ポンプ場の工期の関係から西側の調査を優先した。また、調査は津島南笹原遺跡と平行して行なわれたため、十分な成果を得ることが出来なかった。遺構としては廃棄土塊43、溝1、不明土塊多数を検出した。

2. 西側部分の調査 (Fig.6)

都合上、旧水路である礫床より西を西側調査区と呼ぶ。調査区の地山は黄褐色のローム土で、シミ状に遺構が存在する。調査の結果、溝、不定形土塊、ピット群を検出した。西側調査区は作業終了後業者へ引き渡した。引渡日は10月21日である。

SD103 (Fig.6)

調査区を北東から南西へと走る溝である。今回の調査では、幅50cm、長さ4m、深さ10～20cmを検出した。埋土は明褐色土の単一土層で、地山土へと漸移的に変化する。溝からは、玄武岩が数個出土したのみで、時期決定に至るような遺物の出土はなかった。

SX106 (Fig.8)

調査区主軸西端で検出された不定形土塊で長さ2.8m、幅1.1m、深さ最大40cm、主軸の傾きはN-76°-Wを測る。埋土は褐色土の単一土層で、地山土へと漸移的に変化する。この土壌からも遺物の出土はない。風倒木痕の可能性も残る土壌である。

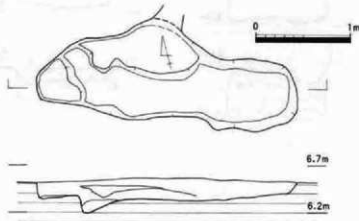


Fig. 8 SX106 (S=1/40)

3. 東側部分の調査 (Fig. 7)

旧水路の腰床より東側を東側調査区とする。東側調査区は石灰色粘土が地山を形成する。Nグリットより東に広がるローム土を掘り込めば十数センチで粘土層となる。粘土は途中露出し、Eグリットまで広がる。このN~Eグリットがもっとも遺構の密度が濃い部分である。調査は西側の土壌から行った。

廃棄土壌

SK002 (Fig. 9)

M2グリットから検出された、楕円形の土壌である。東側部分では最も西に位置する遺構である。法量は長軸0.96m、短軸0.74m、深さ0.5m。主軸の傾きはN-11°-Eを測る。断面は床面に向かい緩やかに広がる袋状となる。床面には中央部に一段低い掘り込みを有していたが、図面作成の不手際から図示しえなかった。土層から自然に埋没したと考えられる。遺物は古式土師器の小破片を数点出土したが、細片のため図化しえなかった。

SK004 (Fig. 9)

K2グリットから検出された、ほぼ楕円形の土壌で、西にSK006、東にSK029、南にSK027が位置する。法量は長軸1.4m、短軸1.02m、深さ0.34m。主軸の傾きはN-37°-Wを測る。遺物は古式土師器の小破片を出土したが、細片のため図化しえなかった。

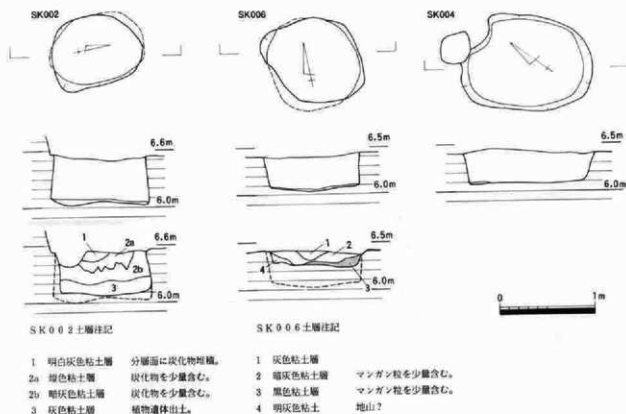


Fig. 9 SK002・004・006 (S=1/40)

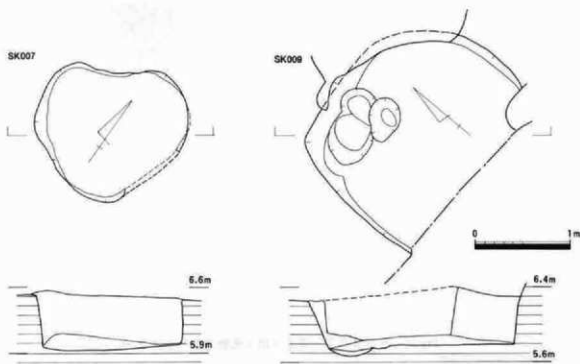
SK006 (Fig.9)

K2、K3グリットから検出された、楕円形の土壌である。西側はSK012と接し、東にSK004、南にSK014が位置する。法量は長軸1.03m、短軸0.88m、深さ0.36m。主軸の傾きはN-80°-Wを測る。断面は床面に緩やかに広がる袋状となる。遺物は古式土師器の小破片を出土した。細片でかつ磨滅が激しく、図化する物ではなかった。

SK007 (Fig.10)

L2グリットから検出された楕円形の土壌で、西側にSK011、東側にSK012が位置する。法量は長軸1.03m、短軸0.88m、深さ0.36m。主軸の傾きはN-80°-Eを測る。

遺物は土師器と木杭片を出土した。土器は弥生後期から古墳時代初頭にかけてのものである (Fig. 11)。1は土師器の甕で、口縁部端の立ち上がりは認められず、粘土を張りつけた段があり、口縁部に1条の沈線が走る。内外面ともにハケ目を行う。外面はススの付着が顕著である。2は土師器の甕の胴部で、タタキの後ハケ目を施している。またススの付着が顕著である。内面はヘラケズリを行う。3は土師器の甕の口縁部で、口縁部端のつまみ上げが明瞭に現れている。4は土師器の胴部で、外面はタタキの後ハケ目を施し、火を受けた痕跡が見られる。内面はケズリが見られる。5は弥生土器の甕の底部で、調整は畿内の第V様式に似ている。外面はタタキが施され、内面は指圧後ナデが施され、炭化物が付着している。



SK009土層注記

- | | |
|---------------|------------------|
| 1 黒灰色粘土層 | 植物根多く混入、鉄分の沈着多い。 |
| 2 明灰色粘土層 | 鉄分の沈着少量、ラミナ状堆積? |
| 3 灰色粘土層 | 鉄分の沈着少量。 |
| 4 暗灰色・黒色粘土混合層 | 2種の粘土が交互に堆積。 |
| 5 暗灰色粘土層 | 土器包含層。 |

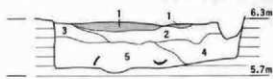


Fig.10 SK007・009 (S=1/40)

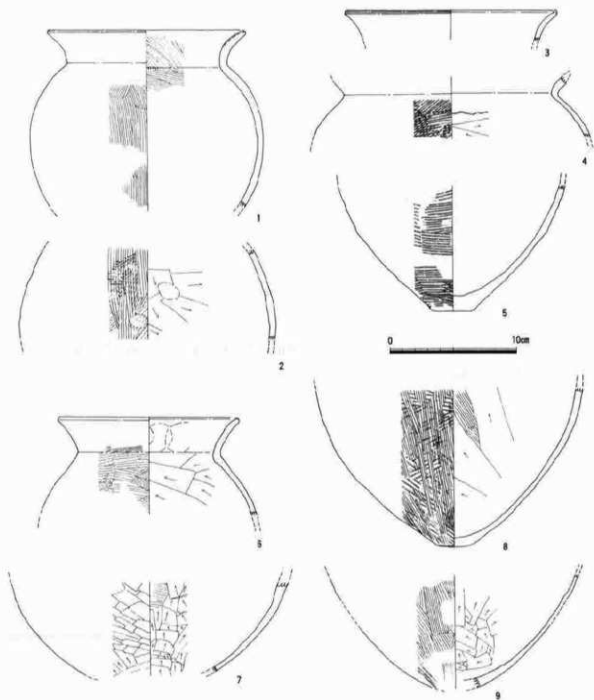
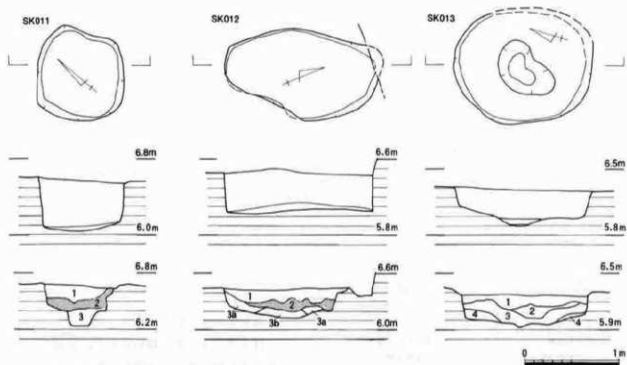


Fig.11 SK 0 0 7・0 0 9出土遺物 (S=1/3)

木製品はいずれも木杭である (Fig.30)。2は現存で46cmを測る。風化の仕方からみて、針葉樹と思われる。1は現存で63cmを測る。先端は刃物により3方向から面取りが行われている。

SK 0 0 9 (Fig.10)

G1、2、H1、2グリットから北側の一部が検出された。北側にSK 0 1 8と切り合い、東側にSK 0 3 5、西側にSK 0 3 2が位置する。法量は長軸2.22m、短軸1.78m、深さ0.62m。主軸はN-50°-Wを測る。本来は南北方向に主軸を持つ楕円形の土壌であると思われる。土層は、2層はラ



SK011土層注記

- 1 黒灰色粘土層 花崗岩粒を少量含む。
- 2 黒色粘土層 マンガン粒多く含む。
- 3 暗灰色粘土層 マンガン粒を微量含む。

SK012土層注記

- 1 暗灰色粘土層 分層面に植物遺体堆積。
- 2 黒色粘土層
- 3a 暗灰色粘土層
- 3b 灰色粘土層

SK013土層注記

- 1 灰色粘土層
- 2 暗灰色粘土層 マンガン粒を微量含む。
- 3 灰色・暗灰色粘土混合層
- 4 黒色粘土層

Fig.12 SK011・012・013 (S=1/40)

ミナ状の堆積で、一時的に水に浸かっていたことが判る。その他は暗灰色粘土が堆積している。

出土遺物は弥生終末から古墳時代初頭の土師器で主に5層から出土している (Fig.11)。6は古式土師器の甕の口縁で、外面はタタキが施されており、ススの付着が著しい。内面はケズリ、口縁部はナデが行われ、口縁端部の立ち上がりも明瞭である。7は壺の底部で、遺存部分の上端が水平に切れていることから、鉢として転用していた可能性がある。外面はハケ目の後ミガキが施されており、部分的にススの付着が見られる。内面はケズリを施している。8は甕の底部で、外面はタタキ後ハケ目を施し、ススの付着が著しい。内面は上半部にハケ目、下半部にケズリを施している。9は甕の底部である。外面はハケ目、内面はケズリを行う。これも外面のススの付着が著しい。

SK011 (Fig.12)

M2グリットから検出された、隅丸方形の土壌である。南側にSK002、東側にSK007が位置する。分量は長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.54m。主軸の傾きはN-40°-Wを測る。土層は上層の黒色粘土層と下層の灰色粘土層に大別され、下層から遺物を出土した。

遺物は土師器と木杭がある (Fig.14-1、Fig.30)。土師器は甕の口縁で、口縁端部の立ち上がり

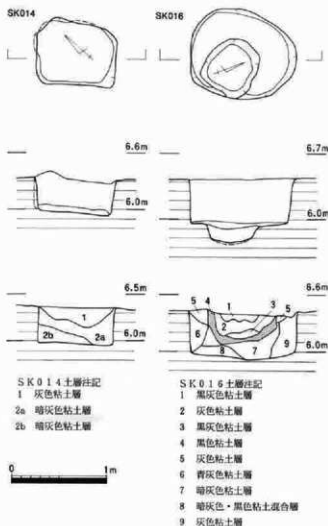


Fig.13 SK014・016 (S=1/40)

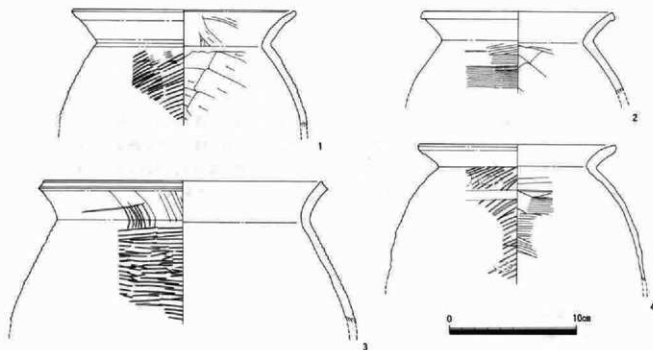


Fig.14 SK011・013・014・016 出土遺物 (S=1/3)

は弱く、外面はタタキ、内面はケズリを施す。
 外面はススの付着が著しい。

木片(3)は木杭の軸部で、14.2cmを測る。

SK012 (Fig.12)

L2、L3グリットから南側の一部が検出された。東側でSK006、南側でSK007と切り会い、SP008、SP025が上から掘り込まれている。法量は長軸1.62m、短軸0.96m、深さ0.49m。主軸の傾きはN-25°-Eを測る。平面プランは細長い半楕円形となる。埋土は上層が黒色粘土層、下層が灰色粘土層となる。遺物は古式土師器の細片を出土したが、図化するには至らなかった。

SK013 (Fig.12)

H2グリットから検出された。東側でSK034と切り会い、南側にSK020、西側にはSK021が位置する。法量は長軸1.47m、短軸1.2m、深さ0.38m。主軸はN-16°-Wを測る。平面プランはほぼ円形で、床面の中央に「く」の字形の浅い掘込みがある。埋土状況は他の遺構と同様に暗灰色粘土層の下に黒色粘土の堆積が見られる。

出土遺物は土師器の甕がある (Fig.14-2)。外面は磨滅が激しいがタタキを施しており、ススの付着が著しい。内面はヘラケズリの後ナデを施す。口縁部は端部成形のための指押さえ痕が外面に残る。

SK014 (Fig.13)

K2グリットから検出された。SK043内に掘り込まれており、北側にSK006、南側にSK026、東側にSK004、027が位置する。隅丸方形のプランを持ち、法量は長軸0.84m、短軸0.72m、深さ0.42m。主軸はN-41°-Wを測る。土層は、他の遺構と同様の堆積状況を示す。

出土遺物は土師器の甕がある (Fig.14-3)。在地系の特色が強く、外面はタタキを施し、ススの付着が著しい。内面はナデ調整と思われる。

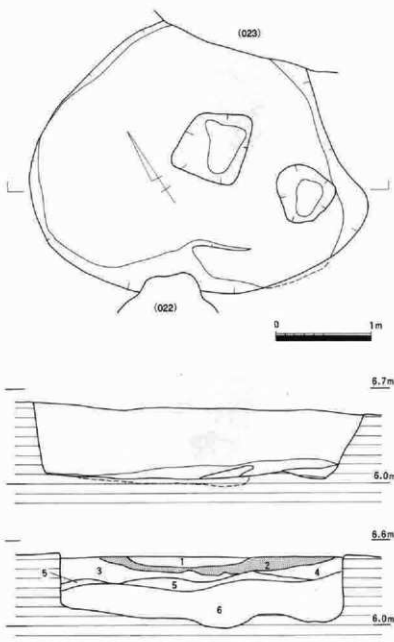
SK016 (Fig.13)

E2グリットから検出された。北側にSK024、023。西側にSK017、南側にSK038が位置する。法量は長軸1.12m、短軸0.94m、深さ0.48m。主軸はN-20°-Eを測る。平面プランは楕円形で、床面に一辺30~60cm、深さ14cmの隅丸方形の土壌がある。埋土状況は他の遺構と同じく、上層の灰色粘土、中層の黒色粘土、下層の灰色粘土の3層に分層できる。

出土遺物は土師器の甕で (Fig.14-4)、外面はほぼ平行にタタキが施されており、ススの付着が著しい。内面は磨滅が激しいが、ナデ調整と思われる。

SK017 (Fig.15)

F2グリットで検出された大型の土壌で、北側でSK023、036、南側でSK022に切られる。東側にはSK016、西側にはSK018が位置する。法量は長軸3.48m、短軸2.64m、深さ0.80m。主軸の傾きはN-57°-Wを測る。平面プランは楕円形であり、床面のほぼ中央部に一片約60cm、深さ10cmの方形の小土壌、南端に直径約60cm、深さ10cmの円形の小土壌が検出された。埋土状況は他の遺構と同様な状態だが、5層にはラミナ状堆積がみられる。



SK017土層注記

- | | |
|----------|-------------------------|
| 1 暗灰色粘土層 | マンガン粒を多く含む。 |
| 2 黒灰色粘土層 | 鉄分沈着多い、マンガン粒を少量含む。 |
| 3 明灰色粘土層 | 分層面に黒色粘土が集中、マンガン粒を少量含む。 |
| 4 灰色粘土層 | 分層面に黒色粘土が集中、マンガン粒を少量含む。 |
| 5 暗灰色粘土層 | ラミナ状に堆積。 |
| 6 黄灰色粘土層 | 鉄分を少量含む。 |

Fig.15 SK017 (S=1/40)

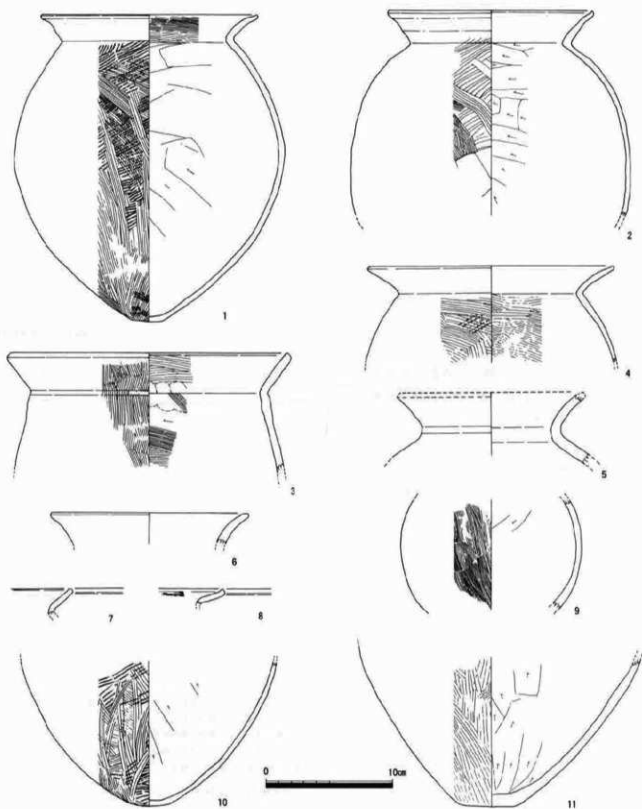
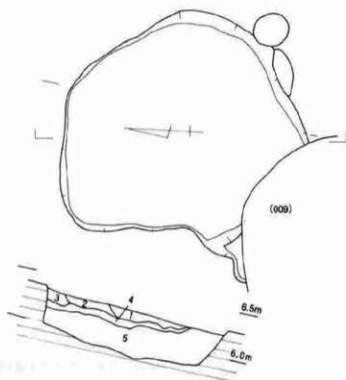


Fig.16 SK 017 出土遺物 (S=1/3)

出土遺物は弥生終末から古墳時代初頭の土師器であり (Fig.16)、甕 (1~8、10、11) と小型壺 (9) が見られる。1 はほぼ完形であり、外面にタタキの後ハケ目を施し、著しいススの付着が見られる。内面は胴部をケズリ、口縁部にハケ目を施しており、炭化物の付着が見受けられる。2 は外面の上半はタタキ、下半をハケ目、内面はケズリを施してある。外面へのススの付着が著しい。3 は在

地系の特徴が強く、内外面にハケ目を施す。肩部内面には指押さえ痕が見られ、外面へのススの付着が著しい。4は外面にタキを施してあり、一部にハケ目が見られる。外面にススの付着が見られる。内面はハケ目調整が施されている。5は外面をナデ、内面にはケズリを施しており、外面へのススの付着が著しい。他の土器よりも少し時代の下ものと思われる。6は磨滅の激しい小破片である。内外面ともナデ調整が施されており、外面はススが著しく付着している。7～8は口縁部の小破片であるが、いずれも口縁端部の立ち上がりが見られるものであり、古い形式の物と思われる。10は外面にタキの後ハケ目、内面にはケズリを行い、外面にはスス、内面には炭化物が付着している。11は底部が広く、古い様相を示している。外面はハケ目調整でススの付着が著しい。内面はケズリを行い、炭化物の付着が見られる。9は肩部から胴部にかけての破片である。外面はハケ目、内面はケズリを行う。ススの付着は外面に部分的に見られる。



SK 018 土器注記

- | | |
|----------|-------------------|
| 1 暗灰色粘土層 | マンガン粒を散見含む。 |
| 2 灰色粘土層 | 多色粘土ブロックの混入多い。 |
| 3 明灰色粘土層 | |
| 4 青灰色粘土層 | ラミナ状堆積。 |
| 5 暗灰色粘土層 | 大粒の多色粘土ブロックの混入多い。 |



Fig.17 SK 018 (S = 1/40)

SK 018 (Fig.17)

G2グリットから検出された大型の廃棄土壌で、南側をSK 009に切られ、東側にSK 017、022、西側にSK 034が位置する。法量は長軸2.60m、短軸2.30m、深さ0.55m。主軸の傾きはN-2°-Wを測る。平面プランは隅丸方形を呈すると考えられる。埋土状況は上層の暗灰色粘土層、中層の灰色粘土層、下層の暗灰色粘土層に3分され、4層にラミナ状堆積が見られる。

出土遺物には弥生終末から古墳時代初頭にかけての土器と土師器があり (Fig.18)、甕 (1～3) と壺 (4) がある。1は外面はタキの後にハケ目を施し、著しくススが付着している。内面は口縁部から 肩部の下にかけてハケ目を施し、それより下方はケズリを行う。2は外面はタキを行い、著しいススの付着が見られる。内面はハケ目を施し、炭化物の付着が認められる。3は口縁部の小破片で、全体にナデ調整が行われ、口縁端部の立ち上がりもしっかりしている。外面はススの付着が著しい。4は壺の底部と思われる小破片である。磨滅の度合いがひどく、時期を決定するまでには至らなかった。

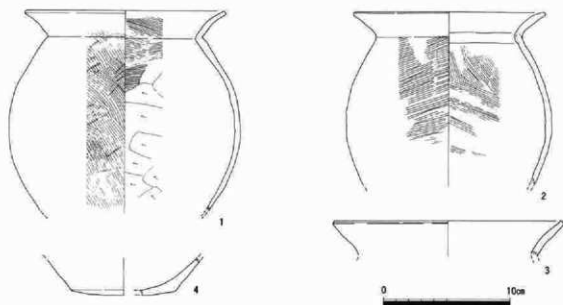


Fig.18 SK018出土遺物 (S=1/3)

SK019 (Fig.19)

I 2グリットから検出された、ほぼ楕円形の土塊である。東側にSK020、西側にSK031、北側にSK021、南側にSK039が位置する。法量は長軸1.58m、短軸1.14m、深さ0.29m。主軸の傾きはN-50°-Wを測る。埋土状況は上層の灰色粘土層と下層の暗灰色粘土層の層に大別される。

遺物は古式土師器の甕の小破片で (Fig.20-1)、内外面にハケ目を施しており、口縁端部の立ち上がりがかかりと残る。また口縁に指圧痕が見られるが、何らかの調整の過程において付けられたものかそうではないのかは、はっきりしない。

SK020 (Fig.19)

H2、I 2グリットから検出された。周囲を多くの遺構に囲まれており、北側にSK013、021、西側にSK019、南側にSK032、039が位置する。法量は長軸1.62m、短軸1.00m、深さ0.29m。主軸の傾きはN-61°-Wを測る。楕円形の平面プランをもち、断面は2段掘りの形状を呈する。埋土状況は、上層の暗灰色粘土層、下層の灰色粘土層に大別される。

遺物は弥生終末から古墳時代初頭にかけての甕がある (Fig.20-2~3)。3は外面はタタキの後ハケ目を施しており、底部を中心にススの付着が認められる。内面は上半にハケ目、下半にケズリを行っている。2は甕の肩部の小破片である。外面はタタキ、内面はハケ目を行い、同一個体の小破片には炭化物の付着が見られる。

SK021 (Fig.19)

I 2グリットから検出された、楕円形の土塊である。東にはSK013、南にはSK019、020が位置する。法量は長軸1.66m、短軸1.44m、深さ0.32m。主軸の傾きはN-24°-Wを測る。埋土状況は、上層より灰色粘土、暗灰色粘土が交互に堆積しているが、3層はラミナ状堆積が見られる。

遺物は土師器の小破片を出土したが、実測しうる物ではなかった。

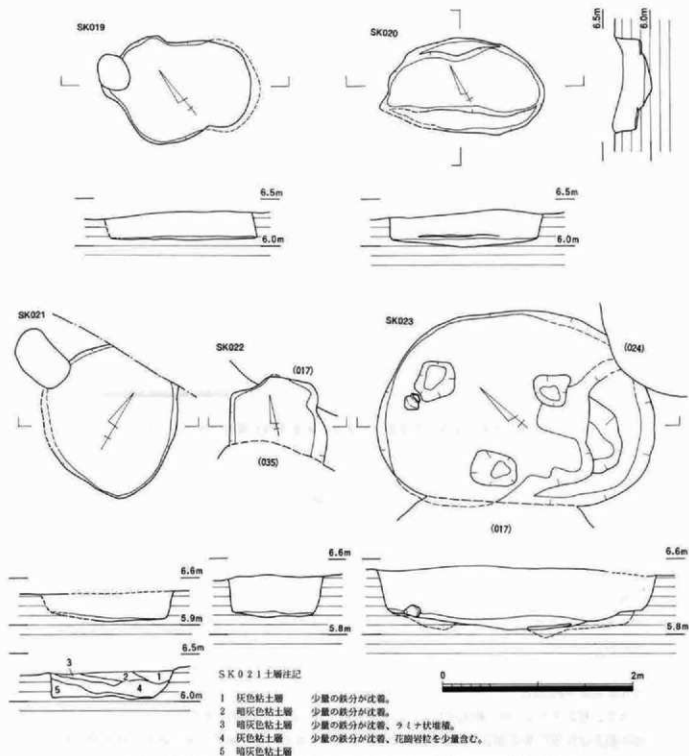


Fig.19 SK019・020・021・022・023 (S=1/40)

SK022 (Fig.19)

F2、G2グリットから検出されたほぼ方形の小土壇で、北側のSK017を切り、南側でSK035に切られている。現存部位での法量は、長軸0.61m、短軸1.01m、深さ0.44mを測る。埋土状況は上層より、暗灰色粘土、灰色粘土と堆積していた。

遺物は土師器を出土した(Fig.20-4)。口縁部の小破片であるが、内面にハケ目が見られ、端部の立ち上がりも明瞭であり、古い様相を示すものである。

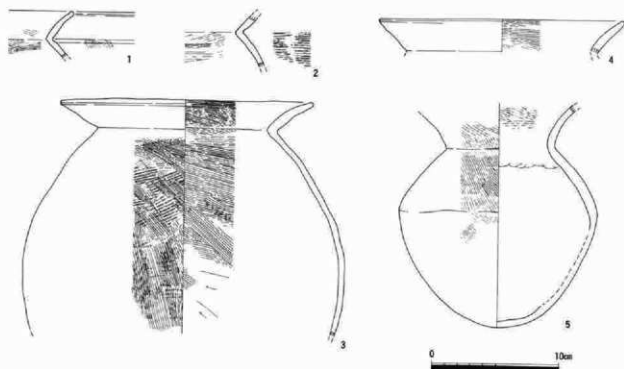


Fig.20 SK 0 1 9・0 2 0・0 2 2・0 2 3出土遺物 (S=1/3)

SK 0 2 3 (Fig.19)

E 3、F 3グリットから検出された、大型の廃棄土壌である。平面プランは楕円形で、法量は、長軸2.96m、短軸2.02m、深さ0.73m。主軸の傾きはN-40°-Wを測る。床面他の遺構が平坦、もしくは一段のみ深くなるのと異なり、起伏が目立つ遺構である。埋土状況は上層より黒灰色粘土層、灰色粘土層、明灰色粘土層、灰色・暗灰色粘土混合層の4層に分層される。

遺物は4層から出土したが、量は少なく、図化したのは弥生時代後期の壺1点のみである (Fig. 20-5)。壺は口縁部を失い、表面の磨滅も激しいが、内外面にハケ目を施されている。器形は底部は丸底で、胴部はソロバン玉状に張り出している。

SK 0 2 4 (Fig.21)

E 2、E 3グリットから検出された、ほぼ円形の土壌である。法量は直径1.64m、深さ0.86m、主軸の傾きはN-80°-Wを測る。床面は段状の部分も見られるが、掘り鉢状に落ち込み、最も深い部分でフラットになる。埋土状況は上層から灰色粘土層、黒色粘土層、暗灰色粘土層と堆積してゆく。

遺物には土師器と木杭破片がある (Fig.22,-1~3、Fig.30)。1は甕の口縁で、端部の立ち上がりもしっかりしており、内面にハケ目を施している。2は甕の肩部から胴部にかけての小破片であるが、外面はタタキを行い、内面はハケ目を施している。3は外面タタキの後ハケ目を施し、部分的にススの付着が見られる。内面は上方をハケ目、下方はケズリを行っている。これらはいずれも古い様相を有しているものである。

木杭 (Fig.30-4) は現存量は約22cmを測る。虫食いなどの痛みが激しく、先端部は失われているが、反対側は工具を用いて平坦面を作りだしている。

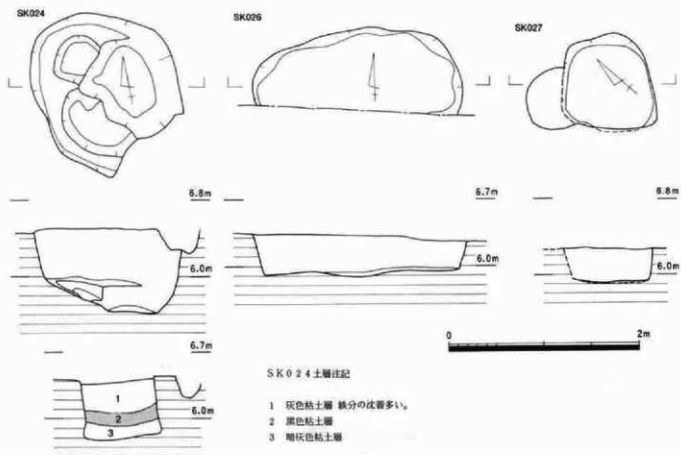


Fig.21 SK024・026・027 (S=1/40)

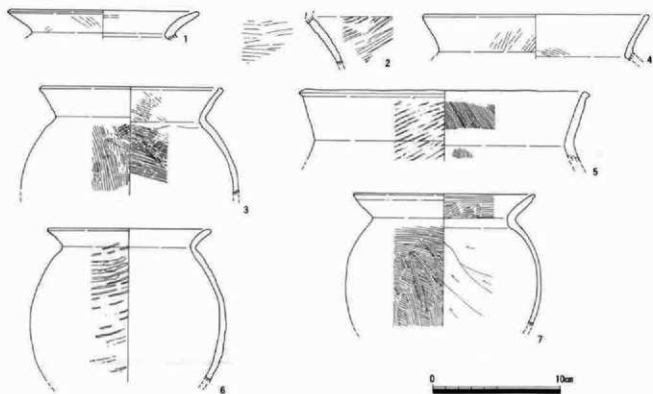


Fig.22 SK024・026出土遺物 (S=1/3)

SK026 (Fig.21)

K2グリットから北半分を採出された土壌である。本来は楕円形の土壌であろう。北側にSK043、東側にSK027が位置する。調査区範囲内での法量は長軸2.20m、短軸0.88m、深さ0.46m。主軸の傾きはN-89°-Wを測る。

遺物は土師器の甕を出土した (Fig.22-4~7)。4は在地系の特色を有す甕の口縁部で、端部に刻み目を有する。胴部外面はタタキの後ハケ目、内面はケズリを施す。5も在地系の甕で、外面はタタキ、内面はハケ目を施す。6は外面にススが厚く付着している。外面はタタキ、内面は工具によるナデが施されている。7は外面はタタキの後ハケ目、ススの付着が著しい。内面は同部はケズリ、口縁部はハケ目を施している。

SK027 (Fig.21)

K2グリットから採出した、隅丸方形の土壌である。北側にSK004、西側にSK026、東側にSK040が位置する。法量は長軸1.00m、短軸0.90m、深さ0.44m。主軸の傾きはN-49°-Eを測る。この遺構から遺物は得られなかった。

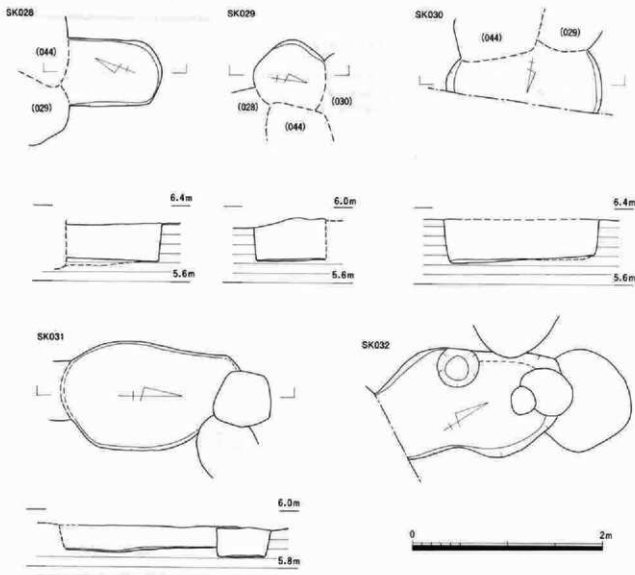


Fig.23 SK028・029・030・031・032 (S=1/40)

SK028 (Fig.23)

J2グリットから検出された、楕円形の土壌である。北側半分をSK029、044に切れ、南側にSK041、西側にSK004が位置する。法量は現存部分で長軸1.02m、短軸0.72m、深さ0.44m。主軸の傾きはN-19°-Wを測る。

遺物は弥生終末から古墳初期にかけての土器の細片が数点出土したが、いずれも図化するには至らなかった。

SK029 (Fig.23)

J2グリットから検出された、円形の土壌で、南側のSK028、北側のSK030を切り、SK044に東側を切られている。西側にはSK004が位置する。法量は現存部分で長軸0.77m、短軸0.70m、深さ0.46m。主軸の傾きはN-87°-Wを測る。

遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器、土師器を出土した (Fig.24-1)。1は弥生時代後期の壺の口縁部で、口縁端部の平面に刻み目を有している。調整は内外面共にナデの後ハケ目を施している。他の遺物については大半が細片であり、図化しうる物ではなかった。

SK030 (Fig.23)

J3グリットから検出された土壌である。北側の調査区境界に位置し、南側でSK029、044に切られている。本来は楕円形の土壌であろう。現状での法量は長軸1.63m、短軸0.70m、深さは0.48m。主軸の傾きはN-82°-Eを測る。

遺物は古墳時代初期の土師器片があるが、細片であり、図化するには至らなかった。

SK031 (Fig.23)

I2、J2グリットから検出された楕円形の土壌である。東側にSK019、西側にSK041が位置し、北側と南側は小土壌に切られている。現存部位から復元される法量は、長軸1.90m、短軸1.14m、深さ0.28m。主軸はほぼ真北をとる。

遺物は古墳時代初期の土師器片で (Fig.24-2)、2は壺の口縁部である。焼成は悪く、磨滅も激しいため調整は不明である。端部の立ち上がりは見られないことから、他の遺構の出土遺物よりは時代の下るものと考えられる。

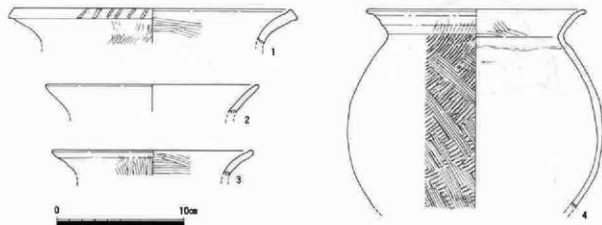


Fig.24 SK029・031・032出土遺物 (S=1/3)

SK032 (Fig.23)

H1, H2グリットから検出された土壌である。北側はSK020や小土塊群の掘り込みにより遺構のラインを検出しえなかったが、本来は楕円形の土塊であろう。東側にはSK009、西側にはSK039が位置し、南側は調査区境界により切られる。法量は現存部位からの推定復元で、長軸2.00m、短軸1.06m、深さ0.30m。主軸の傾きはN-23°-Eを測る。床面には西側に15cm程の掘り込みが見られる。

遺物は弥生終末から古墳時代初期の土師器の甕がある (Fig.24-3・4)。3は内外面共にハケ目が施されており、口縁端部の立ち上がりも明瞭である。4は胴部外面にタタキ後ハケ目を施しており、内面はナデが行われている。また部分的ではあるが口縁内部にハケ目が見られ、端部の立ち上がりもしっかりしたものである。

SK034 (Fig.25)

H2グリットから検出された土塊で、北側を調査区境界により切られている。東側にSK018、西側にSK013が位置する。現状での法量は長軸1.68m、端軸1.10m、深さ0.32m。主軸の傾きは

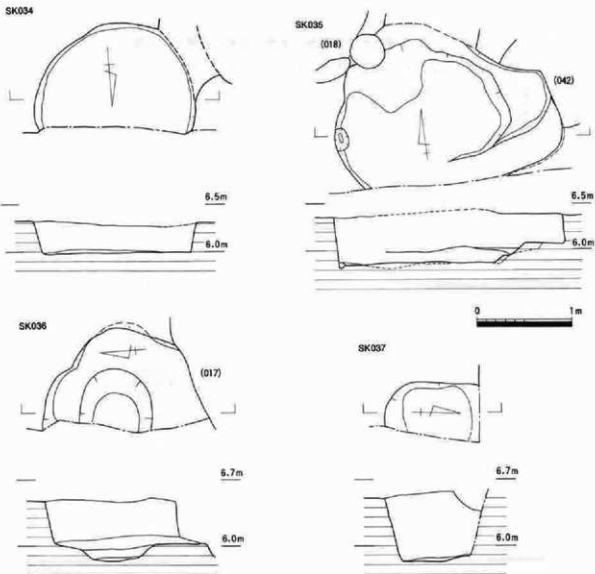


Fig.25 SK034・035・036・037 (S=1/40)

N-86°-Wを測る。

遺物は弥生終末から古墳時代初期にかけての土師器を出土したが、細片であり、図化するには至らなかった。

SK035 (Fig.25)

F1, F2, G1, G2グリットから検出された、楕円形の土壇である。北側のSK022、東側のSK042を切り、南西端は調査区境界に切られている。西側にはSK009が位置する。法量は長軸2.41m、短軸1.70m、深さ0.58m。主軸の傾きはN-84°-Wを測る。床面は他の遺構と異なり、床面が段状になっている。

遺物は弥生終末から古墳時代初期にかけての土師器を出土した (Fig.26) 1は甕で、外面はタタキの後ハケ目を施している。部分的にススの付着が認められる。内面は上方がハケ目、下方がケズリを行う。口縁端部の立ち上がりも明瞭である。2は甕の口縁部で、外面はハケ目、内面はナデ調整が施されている。口縁端部の立ち上がりが不明瞭であり、他の遺物と比べ時代の下るものであろう。3は短頸壺の肩部で、外面にハケ目、内面にはケズリの後横ナデを施す。外面へのススの付着が顕著である。4は甕の底部で、外面はタタキの後ハケ目、内面はケズリを施す。外面へのススの付着が顕著である。5は甕の底部で、外面はハケ目、内面は底部に指押さえ痕が顕著に残り、上方はケズリを施している。3と同様、他の遺物より時代の下るものと考えられる。

SK036 (Fig.25)

F3グリットから検出された土壇で、東側半分を検出した。SK023の東側に位置し、南側をSK017に切られている。現状での法量は、長軸1.70m、短軸1.10m、深さ0.62m。主軸の傾きはN-4°-Eを測る。床面は二段掘りになっている。

遺物は古式土師器の小破片を出土したが、図化しうる物ではなかった。

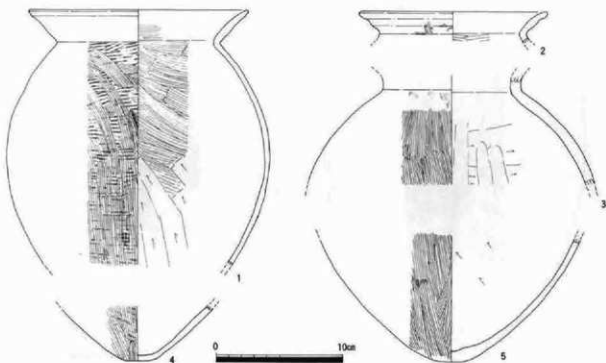


Fig.26 SK035出土遺物 (S=1/3)

SK037 (Fig.25)

E3グリットのコーナーから部分的に検出された土壌である。西側にSK023、南側にSK024が位置する。現状での法量は長軸1.00m、短軸0.62m、深さ0.63m。主軸は真北を測る。
遺物は古式土師器の小破片を出土したが、図化する物ではなかった。

SK038 (Fig.27)

E1、F1グリットから検出された大型土壌である。南側を調査区境界に切られており、北側にS

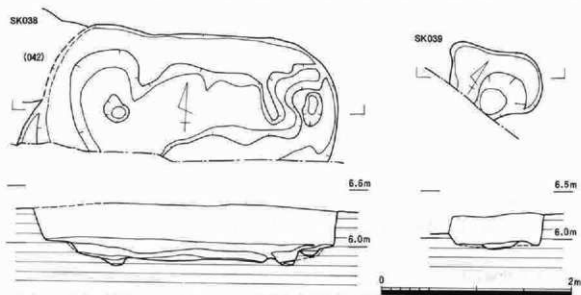


Fig.27 SK038・039 (S=1/40)

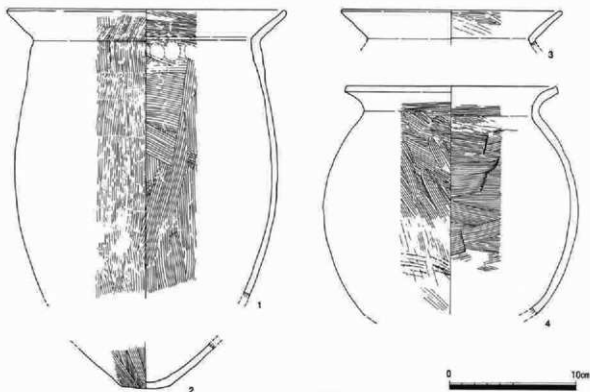


Fig.28 SK038・039出土遺物 (S=1/3)

K016が位置し、西側のSK042を切っている。本来は楕円形の土壇と考えられる。現状での法量は長軸3.20m、短軸1.35m、深さ0.34m。主軸の傾きはN-88°-Eを測る。床面は他の遺構とは異なり、かなりの凹凸が見られる。

遺物は弥生終末から古墳時代初期にかけての土師器を出土した(Fig.28-1・2) 1は在地系の特色が強い甕で、内外面共にハケ目を施し、内面の屈曲部には指圧痕が見られる。外面のススの付着は著しい。2は甕の底部である。外面はハケ目、内面はケズリを施している。底の平坦面が大きく、弥生土器の様相を強く残す。外面にはスス、内面には炭化物の付着が多く見られる。

SK039 (Fig.27)

I1グリットから検出された二段掘りの土壇で、北側にSK019、東側にSK032が位置し、南側は調査区境界に切られている。現状での法量は、長軸0.96m、短軸0.74m、深さ0.34m。主軸の傾きはN-34°-Eを測る。

遺物には弥生終末から古墳時代初頭の古式土師器がある(Fig.28-3・4)。3は甕の口縁部で、内面はハケ目を施し、胴部にはケズリの痕跡がわずかながら認められる。4は甕で、外面はタタキの後ハケ目を施し、ススの付着が著しい。内面は上方がハケ目、下方がケズリを施す。肩部付近に粘土の接合による段が認められる。口縁端部の立ち上がりは明瞭である。

SK040 (Fig.29)

J1、J2グリットから検出された円形の土壇で、東側のSK041を切る。西側にはSK027が位置する。法量は長軸0.70m、短軸0.66m、深さ0.30m。主軸の傾きはN-87°-Wを測る。

遺物には弥生終末から古墳時代初頭の土師器が出土したが、実測しうるものではなかった

SK041 (Fig.29)

J1、J2グリットから検出された楕円形の土壇で、西側のSK040に切られ、南側は調査区外へと延びている。東側にはSK031が位置する。現状での法量は、長軸1.30m、短軸0.90m、深さ0.28m。主軸の傾きはN-87°-Wを測る。床面には深さ数10cmの小土壇が検出された。

遺物は弥生終末から古墳時代初頭にかけての土師器が出土した。胴部の小破片で、タタキが認められるが、実測しうるものではなかった。

SK042 (Fig.29)

F1、F2グリットから検出された土壇で、東側はSK038、西側はSK035、北側はSK017に切られており、本来は楕円形の平面プランを持つものと考えられる。現状から復元される法量は長軸1.54m、短軸1.14m、深さ0.33m、主軸の傾きはN-55°-Eを測る。

この遺構からは遺物は検出されなかった。

SK043 (Fig.29)

K2、L2グリットから検出された不定型土壇で、多くのピットが切り込み、東側はSK014に切られている。SK026の北側、SK006、012の南側に位置する。現状から復元される法量は長軸2.24m、短軸1.12m、深さ0.42m、主軸の傾きはN-51°-Eを測る。

この遺構からは遺物は検出されなかった。

SK044 (Fig.29)

J2、J3グリットから検出された土壌で、北側をSK030、西側をSK029、南側はSK028に切られ、東側にSK046が位置する。検出時点での平面プランは長方形を呈し、これから復元される法量は、長軸0.95m、短軸0.64m、深さ0.50m、主軸の傾きはN-67°-Eを測る。

この遺構からは遺物は検出されなかった。

SK046 (Fig.29)

J2、J3グリットから検出された楕円形の土壌で、東側にSP045、西側にSK044が位置する。法量は長軸1.00m、短軸0.70m、深さ0.28m、主軸の傾きはN-6°-Wを測る。

この遺構からの遺物の検出はなかった。

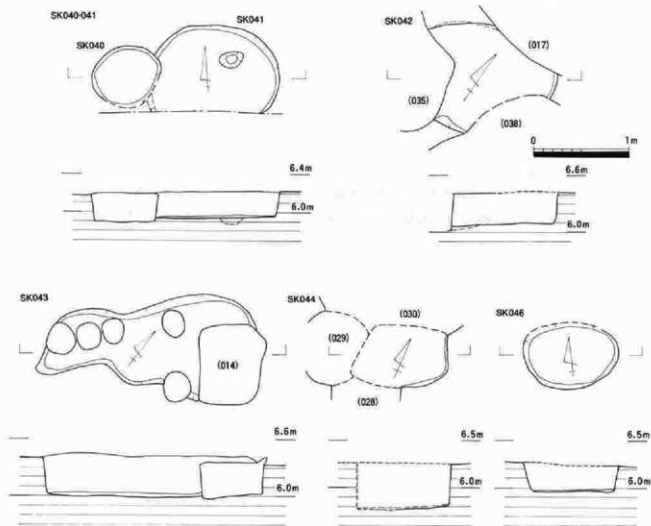


Fig.29 SK040・041・042・043・044・046 (S=1/40)

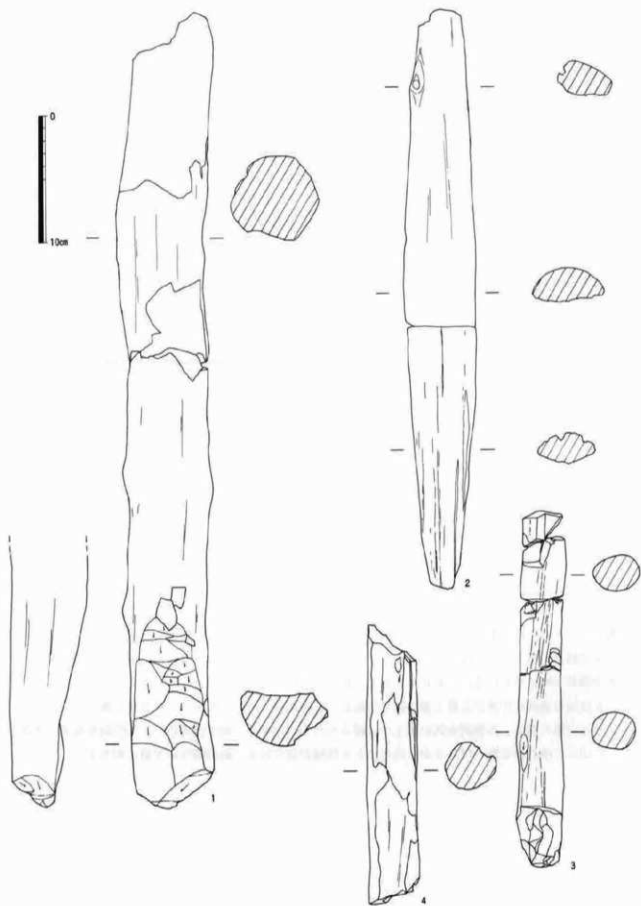


Fig.30 出土木器 (S = 1 / 3)

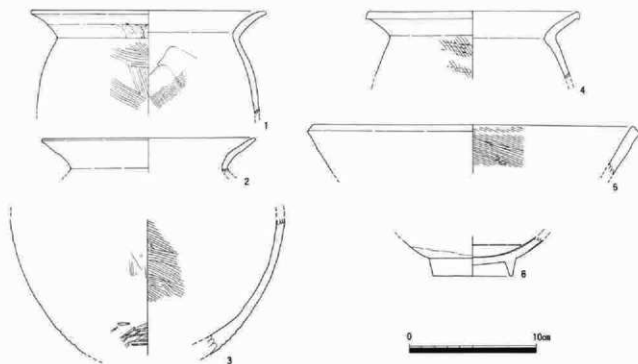


Fig.31 その他の出土遺物 (S=1/3)

その他の出土遺物 (Fig.31)

1はSX003から出土した古式土師器の甕である。SX003は調査区際にあたり、遺構としての性格を明確に捕えることが出来なかった。遺物は磨滅が激しいが、内外面共にハケ目調整が行われ、肩部外面に指押さえ圧痕が見られる。外面へのススの付着も著しい。

3はSP008から出土した古式土師器の胴部である。外面の磨滅が激しいが、内外面共にハケ目が施され、外面底部にはタタキもみられる。ススは両面に少量付着している。

2はSP033から出土した古式土師器の甕の口縁部で、内外面共にナデ調整が施されており、外面にはススの付着が多く見られる。口縁部の破損は激しいが、端部の立ち上がりは認められない。

4は調査区覆土中から採取された古式土師器の在地系の甕の口縁部である。外面はハケ目、内面はナデ調整が施されている。SK013出土の甕と非常に似通っている。

5は周辺区採の中世の瓦質土器の鉢の口縁部で、内面はハケ目、外面はナデ調整が施されている。

6は白磁の碗で、西側調査区の覆土から得られたものである。胎土は乳灰色で、乳白色の不透明釉を施す。底部外面は施釉されていない。森田編年のV群に相当する。

4 小結

1 遺構の性格と時期について

津島佛生遺跡2次調査区は旧水路によって東と西に分けられることは前述したとおりである。調査区西側の各土壌は、遺構と呼ぶには遺存状態が悪く、SD103とSK106が確認できるにすぎない。また遺構からの遺物の出土も見られなかった。唯一この地区の覆土中から白磁碗の破片が出土している。時期は森田編年のV群に相当し、11ct前半の時期があたえられる。この白磁が西側調査区の遺構群に時期を与えるうえで、参考になると思われる。

一方、東側調査区からは廃棄土壌が密集して検出された。この様な遺構群は市内では島田三反田遺跡、古島島相遺跡、下北島遺跡などで確認されている。この遺構は、白色粘土部分に掘り込まれており、黄褐色ローム土の部分にはほとんど見ることができない。全ての土壌で土層の確認を行ったわけではないが、水成層が形成されているもの、植物遺体が黒色粘土層のみに見られるもの、粘土層直下の青灰色砂層を掘り抜く遺構が見られないこと、遺物の出土が少ないことなどの特徴が見られる。これらはこの遺構の性格を判断する上で、重要な手掛かりとなるであろう。

廃棄土壌からは弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての弥生土器、古式土器が出土した。弥生土器は西新町式を遡ることはなく、古式土器は布留式系統のものを含んでいる。このうち、弥生土器を出土したものはわずかに3基で、他は古式土器を得た。このことから、この遺構群の時期は3ct前半から4ct前半であり、3ct後半から4ct初頭にその最盛期を迎えたと考えられる。

2 周辺遺跡との関連について

調査区西側については当初1次調査区との関連が考えられたが、時期的な開きが150~200年に及ぶことから関連性が薄いと考えられる。

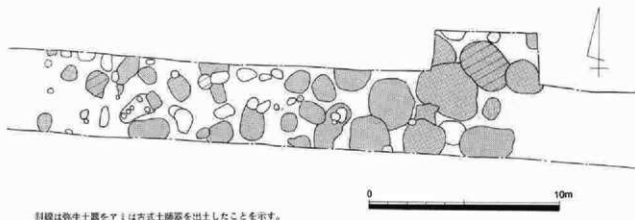


Fig.32 土器出土遺構模式図 (S = 1 / 200)

東側調査区と関連が深いのは、東に位置する津島南笹原遺跡である。細かな内容は次の節で述べるが、遺構の立地、分布状況、構造、出土遺物など、類似する点が多い。

3 まとめ

当調査地点ではトレンチ状の、部分的な調査ではあるが、東側では弥生後期から古墳時代初頭にかけての遺構を検出した。しかしながら、該当時期の集落との関連性において不明な点が多い。また、廃棄土壌についても、本調査の不備な点が多く、周辺遺跡との比較検討を十分に行えたとは言いがたい。当調査区近辺での類例の報告を待ちたい。

(参考文献)

- 小林 勇作 『筑後西部地区遺跡群』 筑後市文化財調査報告書第15集 1995
斉藤 進 他 『多摩ニュータウン遺跡 昭和56年度』 東京都埋蔵文化財センター2 1982

津島南笹原遺跡

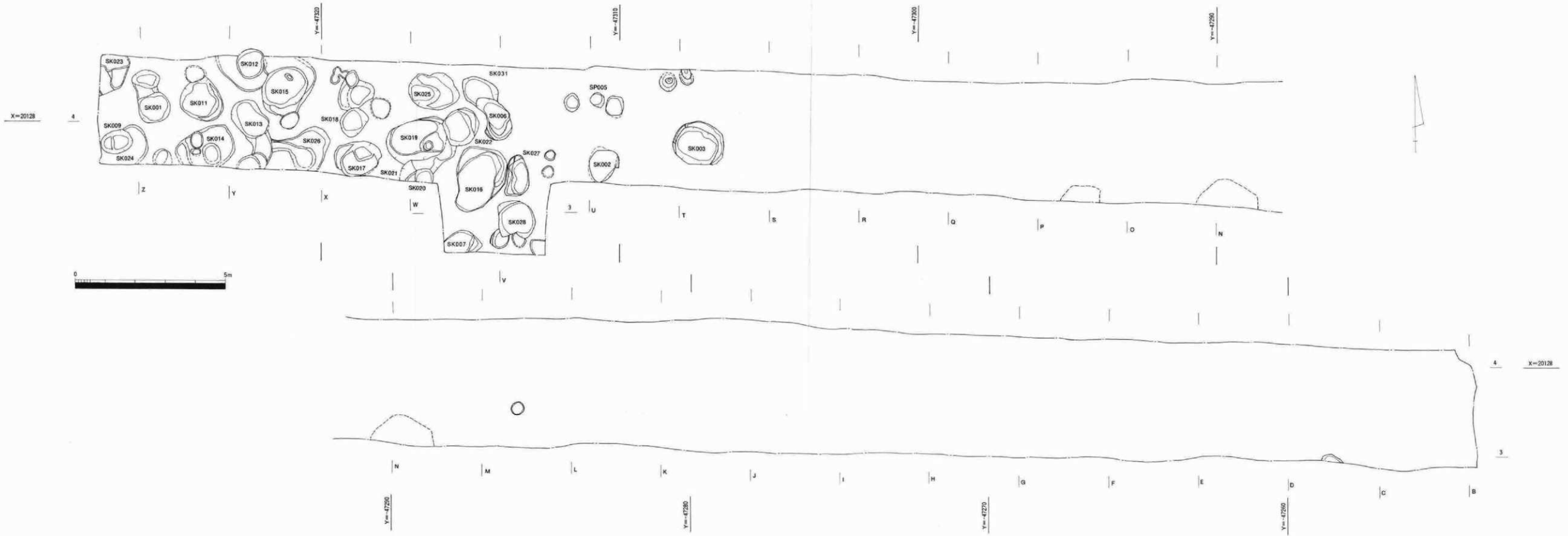


Fig.33. 津島南笹原遺跡全体図 (1/80)

第3節 津島南笹原遺跡の調査

1. 調査概要 (Fig.33)

津島南笹原遺跡は津島南佛生遺跡の東側約35mの所に位置する。調査は第22号支線排水路の建設に伴うもので、調査区は東西に75mを測り、遺構の密な部分は南側に拡張した。調査対象面積は380㎡である。調査区の地山はUグリットを境に、東が黄色砂礫層の上を黄褐色のローム土が覆っている部分と、西側の青灰色シルト質土を石灰色粘土が覆う部分とに大別される。遺構は石灰色粘土部分に影り込まれており、この点で津島南佛生遺跡2次調査と同様な性格を有している。ローム土部分は調査区東端に中世の小土壌を1基確認した以外は、石灰色粘土部分周辺で遺構を確認した。

調査は津島南佛生遺跡の2次調査と平行して10月3日より行い、11月1日に終了した。前述のように津島南佛生遺跡の検出等に時間をかけすぎてしまい、十分な調査は行えなかった。調査の結果、廃棄土壌25、小土壌多数を検出した。

2. 遺構と遺物

SK001 (Fig.34)

Y4グリットにおいて確認された土壌で、東にSK011、南にSK024が位置する。楕円形土壌として検出したが、完掘状態で2連形の土壌となった。同時期に存在した遺構かどうかは土層確認を怠ったため不明である。現状での法量は長軸1.76m、短軸0.95m、深さは北側で0.38m、南側で0.41

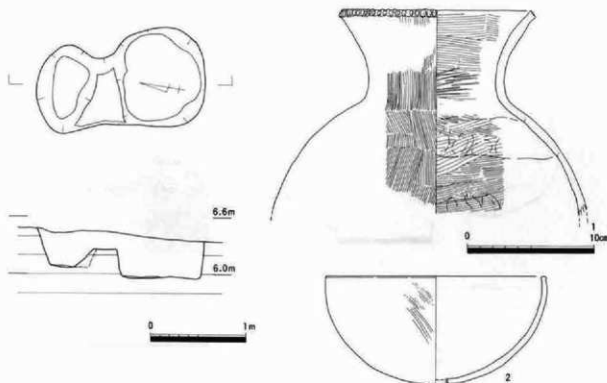


Fig.34 SK001及び出土遺物 (S=1/40, 1/3)

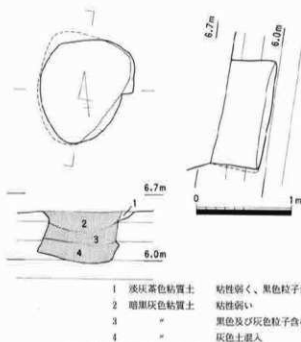


Fig.35 SK 0 0 2 (S = 1/40)

広がり、埋土は粘質土がレンズ状に堆積する。最上層と中位層が黒色であり、これらの間と下層には灰色粘質土層となる。

この遺構からは遺物の出土は無かった。

SK 0 0 3 (Fig.36)

S 3グリットから検出された楕円形の土壌で、西側にSK 0 0 2が位置する。石灰質粘土周辺の遺構としては最も東側に位置している。法量は長軸1.69m、短軸1.46m、深さ0.88m。主軸の傾きはN-14°-Wを測る。断面は遺構上部がわずかに広がり、埋土は粘質土がレンズ状の堆積を示す。

遺物は土師器の甕を得ることが出来た (Fig.36)。外面はらせん状にタキを施した後ハケ目を施

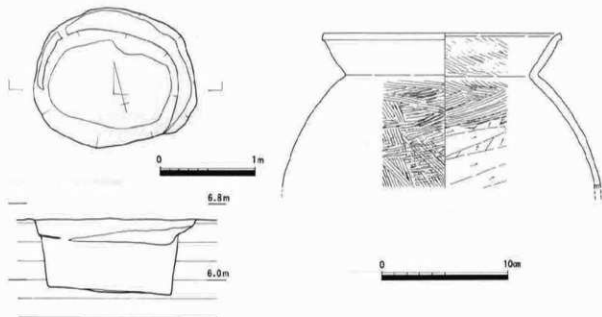


Fig.36 SK 0 0 3 及び出土遺物 (S = 1/40, 1/3)

m、主軸の傾きはN-80°-Wを測る。

出土遺物には壺と鉢がある (Fig.34)。壺(1)は内外面にハケ目を施し、口縁端部には平面刻目を全面に入れる。また肩部から胴部にかけての粘土の継ぎ目には段が残り、指圧痕が見られる。鉢(2)は磨滅が激しいが、外面にハケ目、内面にナデを施しており、部分的にススの付着が認められる。ともに弥生後期後半のものと思われる。

SK 0 0 2 (Fig.35)

T 3グリットから検出された楕円形の土壌で、北側にSP 0 0 8、SP 0 0 5、西側にSK 0 0 3が位置する。法量は長軸1.08m、短軸0.98m、深さ0.50m、主軸の傾きはN-78°-Wを測る。断面はフラスコ状に床面が

し、ススの付着が多く見られる。内面は上半がハケ目、下半がケズリを施す。色調は青灰色に近い。時期は古墳時代初頭に位置づけられる。

SK006 (Fig.37)

V4グリットから検出された不定型土塊で、東側にSP005、南側にSK026、西側にはSK022、025が位置する。北側のSK031と切り会うが、前後関係は確認していない。現状での法量は長軸2.35m、短軸0.94m、深さ0.61m。主軸の傾きはN-36°-Wを測る。廃棄土塊の密集部分の東側にあたる。遺構は西側壁がせり出し、南側壁面は2段掘りとなる。

遺物は土師器の甕を検出した (Fig.37) が、SK031と同時に掘り下げたため、混同してしまった可能性がある。1は外面に部分的にススが付着し、タタキの後ハケ目調整が施されている。内面はケズリが行われている。全体の作りが粗雑な甕である。2は口縁部で、外面はススの付着が多いがナデ、内面にはハケ目を施している。3の甕は口縁部を失っているが、底部は丸底で、胴部がややソロバン目状に張り出している。外面はススの付着が著しく、全体にハケ目調整を行ったのち、肩部下方にゆるやかな波状ハケ目を2条施している。内面は付着物が多いが底部の指圧痕、下半の上方ケズリ上半の斜めケズリが認められる。布留式の甕を意識しているが、作りが粗雑なものである。時期はいずれも古墳時代初頭に位置づけられる。

SK007 (Fig.38)

V2グリットから検出された土塊である。調査区拡張部分の南西のコーナー部分にあたり、その大半が調査区外へ延びるものと考えられる。

遺物としては土師器の小破片が検出されたが、磨滅が激しく時期を特定しうるものではない。

SK009 (Fig.38)

Z3グリットから検出された楕円形の土塊で、北にSK023が位置し、SK024の上から掘り込まれている。調査区南西のコーナー部に位置する。

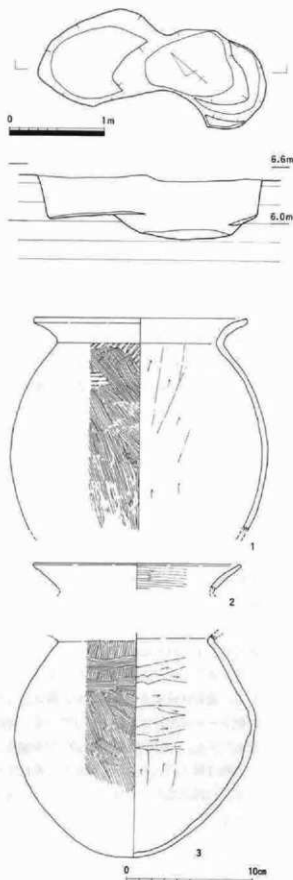


Fig.37 SK006・031及び出土遺物 (S=1/40, 1/3)

法量は長軸1.06m、短軸0.75m、深さ0.65m。主軸の傾きはN-83°-Eを測る。遺構は2段掘りとなっており、スロープ設置の関係上西側が高くなっている。

遺物は土師器の甕がある (Fig.39-1)。外面にはススの付着が多く見られ、胴部はタタキが施されており、口縁部にはハケ目が見られる。口縁部端部は平坦面であり、下方に鋭いつまみ出しが作りだされている。内面は磨滅が激しいがハケ目を施している。古墳時代初頭に位置づけられる。

SK011 (Fig.38)

Y4グリットから検出された楕円形の土壌で、北側をSP010に切られる。東側はSK012、南側にSK014、西側にはSK001が位置する。法量は長軸1.46m、短軸1.36m、深さ0.44m。主軸の傾きはN-35°-Wを測る。遺構は東から南にかけては2段掘りとなっている。

この遺構からの出土遺物は土師器の小破片があるが、時期を特定しうるものではない。

SK012 (Fig.38)

X4グリットから検出された小土壌で、北半分が調査区外へと延びる。東側はSK015、南西にSK013が位置する。本来は円形の平面プランを持つものと思われ、深さは0.44mを測る。

遺物は土師器の小破片を出土している。いずれも実測しうるものではないが、外面のタタキ痕や内面のハケ目調整痕が観察できる。古墳時代初頭に位置づけられる。

SK013 (Fig.38)

X3からX4グリットにかけて検出された楕円形の土壌で、東側にSK015、016、西側にSK011、014が位置する。南側は小土壌群の切り合いで、当遺構が別の小土壌を切っている。現状での法量は、長軸1.33m、短軸0.96m、深さ0.60m。主軸の傾きはN-58°-Wを測る。

遺物は土師器の甕 (Fig.39-2) があり、在地系の器形を有す。内外面にススの付着が見られ、外面は横方向に平行タタキが行われ、口縁部にはハケ目が施されている。また肩部のくびれ部分には粘土紐貼付時にできたと思われる段が見られる。内面はハケ目調整が施されている。古墳時代初頭に位置づけられる。

SK014 (Fig.38)

Y3グリットから検出された土壌で、上部から小穴が掘り込まれており、南側は調査区外へ延びている。遺存状況はよくはないが、隅丸長方形の平面プランが復元できる。床面までは約30cmと浅く、西側コーナー部分は1段上がっている。現状での法量は推定部分も含め、長軸1.92m、短軸1.30m、深さ0.37m。主軸の傾きはN-29°-Eを測る。

遺物は鉢 (Fig.39-3) があり、外面はナデ、内面は底部がハケ目、その他はナデ調整が施されている。口縁部端部は内側につまみ上げが施されている。時期は弥生時代後期後半にあたるものと考えられる。

SK015 (Fig.40)

X4グリットから検出された楕円形の土壌で、北端は調査区外へ延び、南側は小土壌に切られている。南側にはSK016、南西側にはSK013が位置する。現状での法量は、推定部分も含め長軸2.06m、短軸1.90m、深さ0.74m。主軸の傾きはN-37°-Eを測る。北側と南側にテラスをもつ、2段

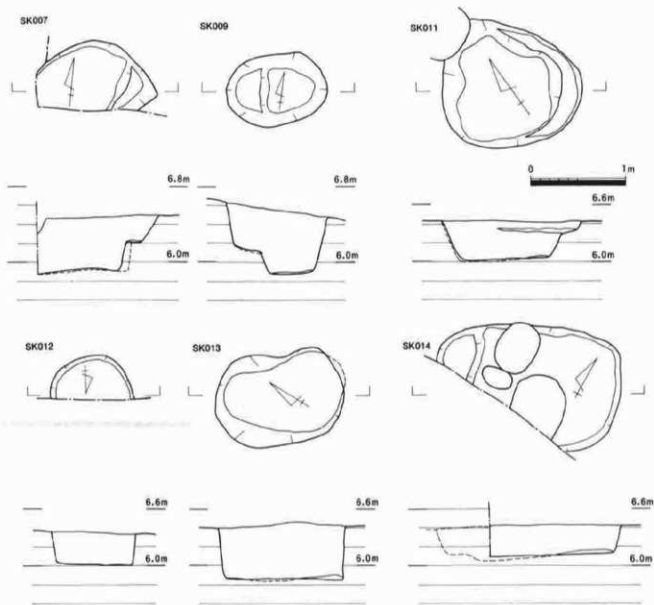


Fig.38 SK007・009・011・012・013・014 (S=1/40)

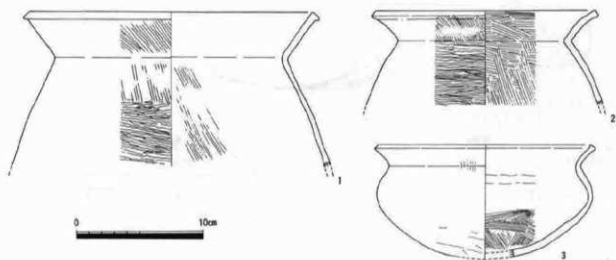


Fig.39 SK009・013・014出土遺物 (S=1/3)

掘りの土壌で、床面には深さ約20cmの小土壌がある。

出土遺物は土師器の甕 (Fig.41-1) がある。外面は斜め方向にタタキを行った後ハケ目を施し、肩部下2cmほどは擦り消しが行われている。内面はハケ目が施され、肩部下には口縁部接合の際の指圧痕が確認できる。古墳時代初頭に位置づけられる。この他には時期の少し下る土師器の小破片が出土した。

SK016 (Fig.40)

X3グリットから検出された不定型土壌で、南側は調査区外へと延びている。現状での法量は長軸1.45m、短軸1.07m、深さ0.62m。主軸の傾きはN-62°-Eを測る。2段掘りの土壌で、下段床面は西

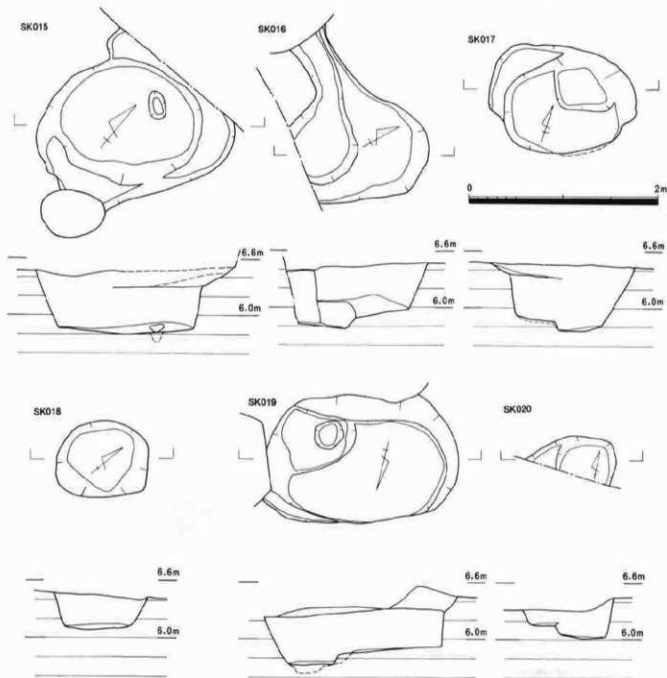


Fig.40 SK015・016・017・018・019・020 (S=1/40)

側へと延び、小土壌によって切られている。

出土遺物は浅鉢 (Fig.41-3) がある。外面は胴部上半に縦方向のハケ目を施した後、下半から斜め方向にケズリを行う。内面はナデである。口縁は直立し、外面はナデ、内面はハケ目が施されている。時期は弥生時代後期後半に位置づけられる。調整法が狐塚遺跡2号住居出土の鉢によく似た資料である。この他には内面にハケ目の見られる土師器の小破片がある。

SK017 (Fig.40)

W3グリットから検出された楕円形の土壌で、北側にSK018、東側にSK019、西側にSK016が位置する。法量は長軸1.57m、短軸1.12m、深さ0.71m。主軸の傾きはN-19°-Eを測る。断面から見ると、3段に掘り込みが行われている。

出土遺物には甕の底部 (Fig.41-5) がある。底部は平面が残りに、外面にはタタキを施すが、工具痕が多く見られる。内面はケズリが行われたと見るが、炭化物の付着が厚く詳細は不明である。時期は弥生時代後期後半と思われる。

SK018 (Fig.40)

W3、W4グリットから検出された楕円形の土壌で、北側には小土壌群が近接し、東側はSK019、南側はSK017、西側にはSK016が位置する。法量は長軸0.96m、短軸0.79m、深さ0.38m。

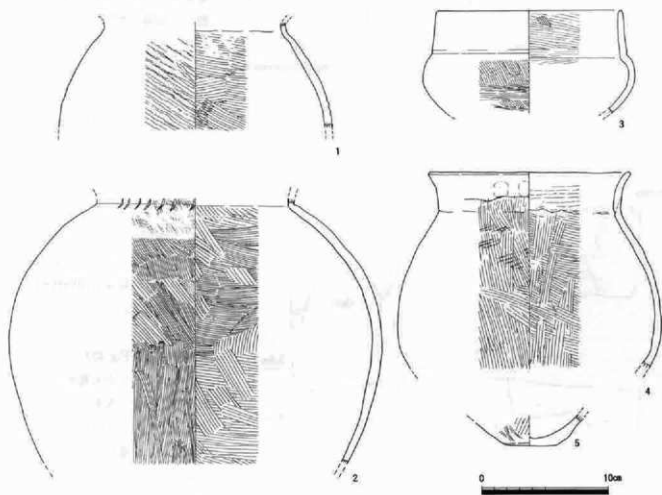


Fig.41 SK015・016・017・018・020出土遺物 (S=1/3)

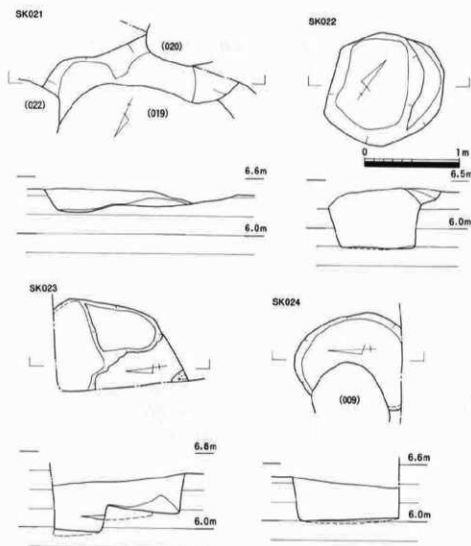
主軸の傾きはN-51°-Eを測る。

遺物は弥生土器の壺の肩部から胴部にかけての破片 (Fig.41-2) がある。外面は部分的に黒斑が見られ、全面に斜め方向のハケ目が施されているが、上半の丁寧さに比べ下半は粗雑である。また胴部には斜めの刻み目が入る。内面もハケ目が施されている。時期は弥生時代後期後半に位置づけられる。

SK019 (Fig.40)

V3、V4グリットから検出された楕円形の土壌で、南側のSK021を切り、東側のSK022に切られている。北側にはSK024、西側にはSK017が位置する。法量は長軸2.00m、短軸1.33m、深さ0.69m。主軸の傾きはN-87°-Eを測る。上場は北側と現存しない東側を除いて緩やかに落ち込み、床面の南西部分が3段になっている。

遺物は土師器の小破片を数点出土した。いずれも図化しうるものではないが、外面にタタキの後ハケ目が施されている。時期は古墳時代初頭に位置づけられる。



SK020 (Fig.40)

V3グリットから検出された土壌で、北側のSK021を切っている。調査区際に位置し、遺構の南部分の大半が調査区外へと延びている。

遺物は土師器の甕 (Fig.41-4) がある。作りは雑で、口縁部分の粘土紐の継ぎ目が内外面共に明瞭に見られる。外面はススの付着が著しく、タタキの後ハケ目を施す、口縁部分は横方向にナデが行われるが、整形時の指圧痕が明瞭に残る。内面はハケ目が施されている。時期は古墳時代初頭に位置する。

SK021 (Fig.42)

V3グリットから検出された土壌で、北のSK019、022と南のSK020に切られており、現状から元の姿を復元することはできない。遺物には土師器の小破片があるが、実測しうる物ではない。

Fig.42 SK021・022・023・024 (S=1/40)

外面のタタキ痕がわずかに観察でき、内面はハケ目が行われる。時期は古墳時代初頭に位置づけられる。

SK022 (Fig.42)

V3、V4グリットから検出された、円形の土壇で、西側のSK019を切っている。北側にはSK025、031、東側にはSK006、南側にはSK026が位置する。法量は主軸の幅1.18m、傾きはN-35°-Eを測る。東側の上場はテラス状に段が形成されており、床面は隅丸方形となる。

遺物は土師器の小破片が出土したが、SK021からの混入品である。

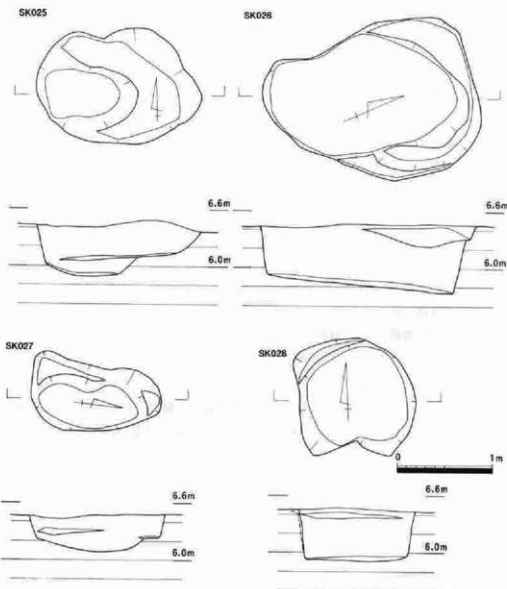


Fig.43 SK025・026・027・028 (S=1/40)

SK023 (Fig.42)

Z4グリットから検出された土壇で、調査区北西側のコーナー部分に位置する。大半が調査区外へ延びるため、形状は不明である。床面はかなりの凹凸がある。

この遺構からの遺物の出土はなかった。

SK024 (Fig.42)

Y3、Z3グリットから検出された楕円形の土壇で、西側はSK009に切られており、南側は調査区外へと延びている。北東にはSK001、東にはSK014が位置している。現状での法量は長軸1.13m、短軸0.95m、深さは0.45m。主軸の傾きはN-87°-Wを測る。

この遺構からの遺物の出土はなかった。

SK025 (Fig.43)

V4グリットから検出されたほぼ楕円形の土壇で、東側にSK031、南側にSK022、019

が位置する。法量は長軸1.73m、短軸1.21m、深さ0.50m。主軸の傾きはN-88°-Wを測る。北側から東壁をまわり南壁にかけてテラス状に段がめぐっている。

この遺構からの遺物の出土はなかった。

SK026 (Fig.43)

V3グリットから検出された楕円形の土壇で、北側にSK006、019、022、東側にSK027、南側にSK007が位置する。法量は長軸2.26m、短軸1.68m、深さ0.73m。主軸の傾きはN-24°-Eを測る。北側の壁面にテラス状の段を有している。

この遺構からは遺物の出土はなかった。

SK027 (Fig.43)

U3グリットから検出された不定型土壇で、南側にSK028、西側にSK026が位置する。法量は長軸1.36m、短軸0.76m、深さ0.37m。主軸の傾きはN-84°-Wを測る。北側と西側の壁面にはテラス状の段がめぐる。

この遺構からの遺物の出土はなかった。

SK028 (Fig.43)

U2、U3グリットから検出された不定型土壇で、北側にSK027が位置し、南側の小穴群を切る。法量は長軸1.21m、短軸1.08m、深さ0.55m。主軸の傾きはN-86°-Wを測る。北西部分にはテラス状に段が形成される。

この遺構からの遺物の出土はなかった。

SP005 (Fig.44)

T4グリットから検出された径50cm程の円形の小土壇で、土師器甕が埋納される形で出土した。甕は口を南に向けており、下になっていた部分は土圧により細かく砕けていた。甕の中からの検出物はない。

甕 (Fig.44) は、外面にタタキの後にハケ目を行い、肩部に沈線が3~5条施されている。内面は底部に指圧痕が見られ、下半は斜め方向ケズリ、上半は横方向ケズリを行う。布留甕を意識した物であるが、倒卵形に近く、胎土も粗い粗雑な仕上がりである。

その他の出土遺物 (Fig.45)

ここに掲げた資料は全て調査区南側を西流する農業用水路からの出土である。1は在地系の古式土師器の甕で、外面は上半に平行タタキ、下半はケズリを行う。スス及び炭化物の付着が著しい。内面はハケ目が行われ、粘土紐の継ぎ目の指圧痕がよく観察できる。古墳時代初頭に位置づけられる。2は須恵器の坏または高杯の口縁部で、内面にヘラ記号のような沈潜が走る。小破片のため時期の決定は不可能である。3は土師器の甕の口縁部で、口縁部直下に1条の沈潜が走る。6ct後半から7ctの時期のものと思われる。4はササカイトの剥片である。

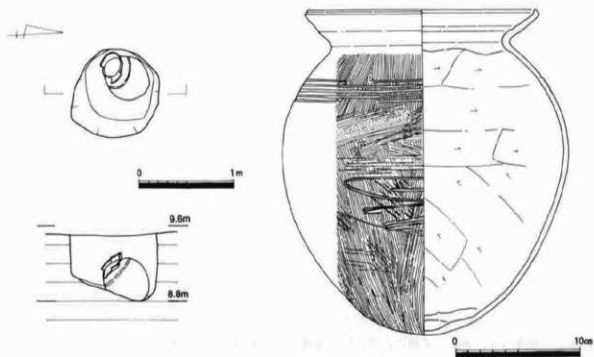


Fig.44 SP 0 0 5 遺物出土状況及び出土遺物 (S = 1/20, 1/3)

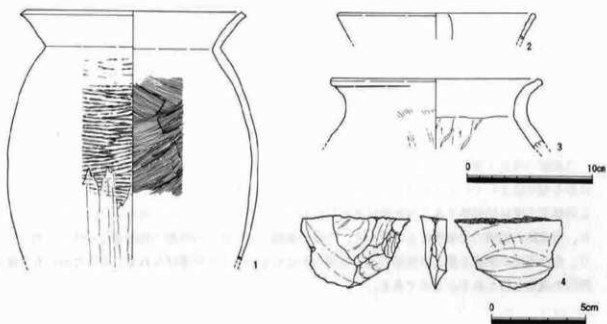


Fig.45 その他の出土遺物 (S = 1/3, 1/2)

3 小結

1 遺構・遺物の性格と時期について

津島南笹原遺跡1次調査では、調査区西側において廃棄土壌群を検出した。その有り様は、近接する津島南佛生遺跡2次調査の調査区東側に見られた廃棄土壌群と同様である。調査期間内に効率的な調査を行えなかったため、埋土状況などは比較できないが、津島南佛生遺跡2次調査区の廃棄土壌群と同様に、別の利用目的があったのではと推測できる。

廃棄土壌群から出土した遺物は弥生後期（西新町式）から古墳時代初期（布留式併行）にかけての土器、土師器が出土している。時期は3ct前半から4ct中頃のものである。

調査区遺構面の灰色粘土と黄褐色ロームとの境目に掘り込まれたSP005からは、布留系の甕が埋納された状態で出土した。東西に位置する柱穴は北側に延び、掘立柱建物を形成する可能性を有している。地鎮に関連する祭祀が行われたのではないか。

調査区東側からは土壌の一部を検出した。調査区の壁面に土師皿の破片が見られたが、小破片のため時期などは不明である。また南側を西流する水路からは6～7ctにかけての土師器が採集された。この事から類推して、遺跡の東側に古代以降の遺構が存在する可能性がある。

2 周辺遺跡との関連性について

当遺跡が津島南佛生遺跡2次調査区東側地点と深い関わりをもつことは前に述べた。しかし、周辺遺跡群の調査は近年の圃場整備事業に伴い行われたものが多く、それ以前における調査は緊急的な物を除いては殆どなされていない。また、実施された調査の多くがトレンチ状の部分調査である。そのため、周辺での同時代の遺跡分布状況など、不明な点が多いのが実情である。

3 まとめ

当遺跡の廃棄土壌群は、遺跡の西側において、さらに広がるものと見られる。白色粘土の地山部分にのみ掘り込まれている状況は、当地域での該当時期の廃棄土壌の有り様の一端を示す資料である。この様な土壌は低湿地である西部地区遺跡群にも見られるものであるが、地山の全面が白色粘土であり、当遺跡の遺構の立地条件とは異なる。今後の課題としては、同時期の集落遺跡の検出と調査により、市の西部の廃棄土壌との性格の違いを明らかにしていくことが挙げられる。そのためにも今後の周辺の調査が待たれるところである。

〈参考文献〉

- 小林 勇作 『筑後西部地区遺跡群』 筑後市文化財調査報告書第15集 1995
西藤 達 他 『多摩ニュータウン遺跡 昭和56年度』 東京都埋蔵文化財センター2 1982

津島北石伏遺跡

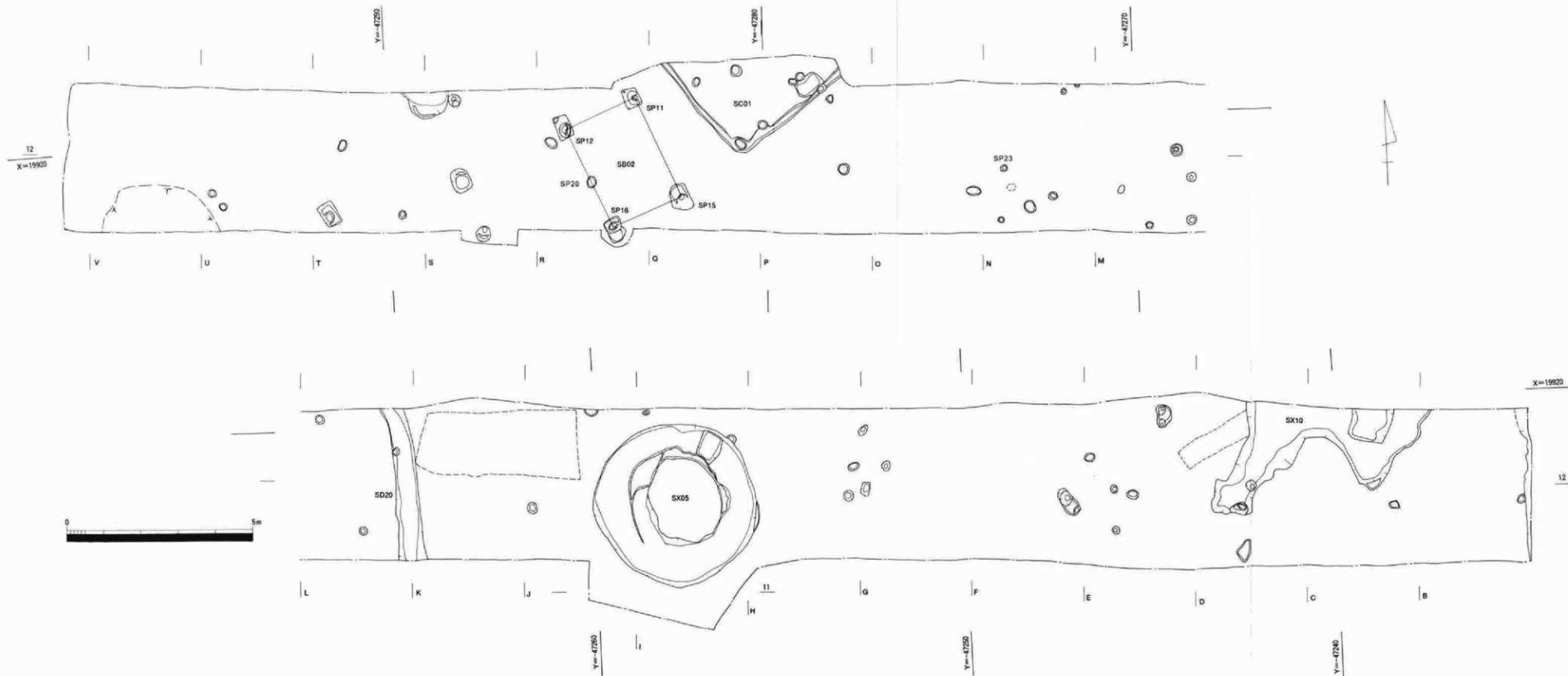


Fig.46. 津島北石伏遺跡全体図 (S=1/80)

第4節 津島北石伏遺跡の調査

1. 調査概要 (Fig.46)

津島北石伏遺跡は津島南笹原遺跡の南約220mの所に位置する。調査は第23号支線排水路の建設に伴うものであり、調査区は東西に約60mを測る。調査対象面積は約330㎡である。調査区の地山は暗黄茶褐色のローム土で、海拔7m程で遺構面に達する。調査は1997年7月31日より行い、途中津島皿ヶ町遺跡と平行しながら9月20日に終了した。調査の結果、竪穴式住居1、掘立柱建物1、周溝状遺構1、柱穴多数を検出した。

2. 遺構と遺物

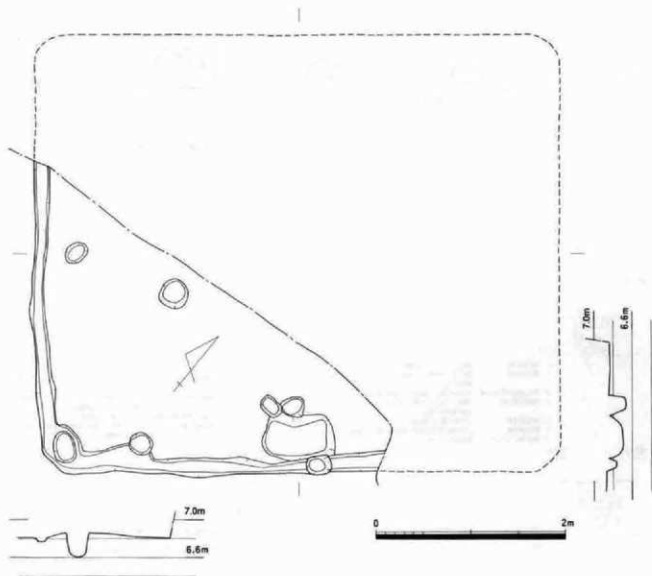


Fig.47 SC 01 (S=1/40)

竪穴式住居

SC01 (Fig.47)

O～Q12グリットから検出された竪穴式住居である。南側コーナーを検出したのみで、その大半は調査区北側へと広がっている。現状から推定される法量は、長軸5.50m、短軸4.60m、主軸の傾きはN-40°-Eを測る、隅丸長方形のプランを持つものと考えられる。表土除去時点で既に床面が現れ、その後の雨により床面埋土が流出したため、床面の貼り替えなどは不明である。

遺物としては弥生後期の壺の肩部片があるが (Fig.49-1)、床面直上が流入土となるため、土師皿片などの混入品も見られる。壁際土壌出土品も小破片であり、時期の特定に至るものではない。

掘立柱建物

SB02 (Fig.48)

P、Qグリットから検出された。1間×1間の長方形のプランを持ち、桁行3.0m、梁2.1m、主軸の傾きはN-66°-Wを測る。西側の中央には補助柱が付く。柱穴は長方形もしくは方形のプランを有し、床面には柱痕が残るが、土層観察時に柱痕跡の確認はできなかった。

遺物は補助柱痕 (P20) から高杯の軸部を出土した (Fig.49-2)。外面には丹塗痕跡が見られるが、時期の特定に至るものではない。

この周囲には同様の柱穴が検出されており、周辺に掘立柱建物群が広がるものと考えられる。

周溝状遺構

SX05 (Fig.50)

H、Iグリットから検出された。円形の平面プランを持ち、法量は直径4.2m、深さ30～50cmを測る。遺構は西側内部を拡張した痕跡があり、この部分で床面が2段になっている。埋土については、土層観察から遺構築造時 (Ⅲ、Ⅳ層) と掘り直し後 (Ⅰ、Ⅱ層) とに大別する事が可能である。

遺物は、Ⅰ層からの出土はない。Ⅱ層からは弥生時代後期前半にかけての土器が出土した。(Fig.51・52)。甕 (1～12、16～21) は口縁部が「く」の字型に強く屈曲し、端部が膨らんでいる。底部は平底で、胴部の器壁は薄い。外面の調整はハケ目が施されている。袋状口縁壺 (15) は稜線が未発達であり、弥生中期後半の特徴を残している。22は壺の底部である。高杯 (13) は鋤先口縁を有し、端



Fig.49 SC01, SB02出土遺物 (S=1/3)

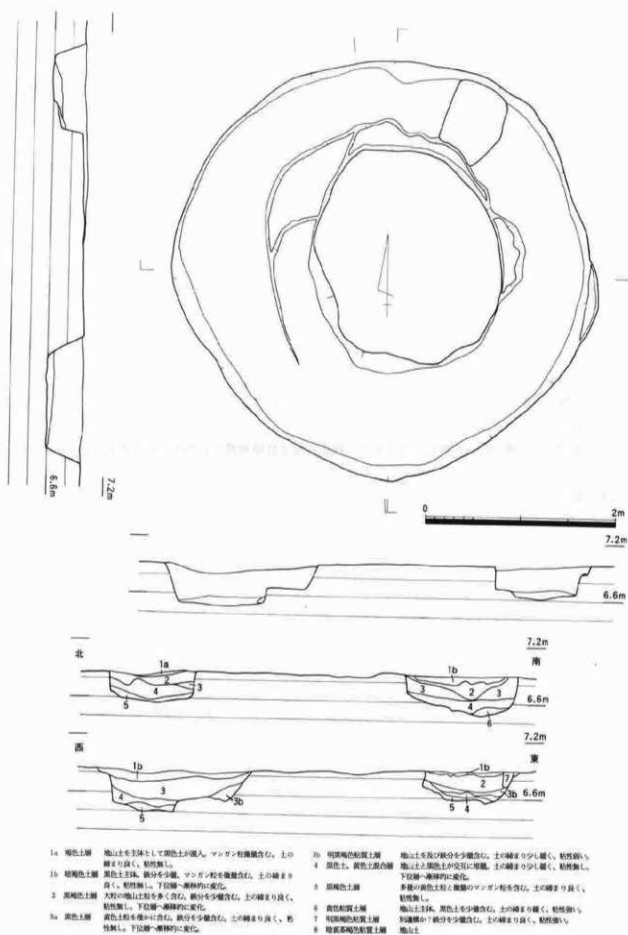


Fig.50 SX 05 (S = 1/40)

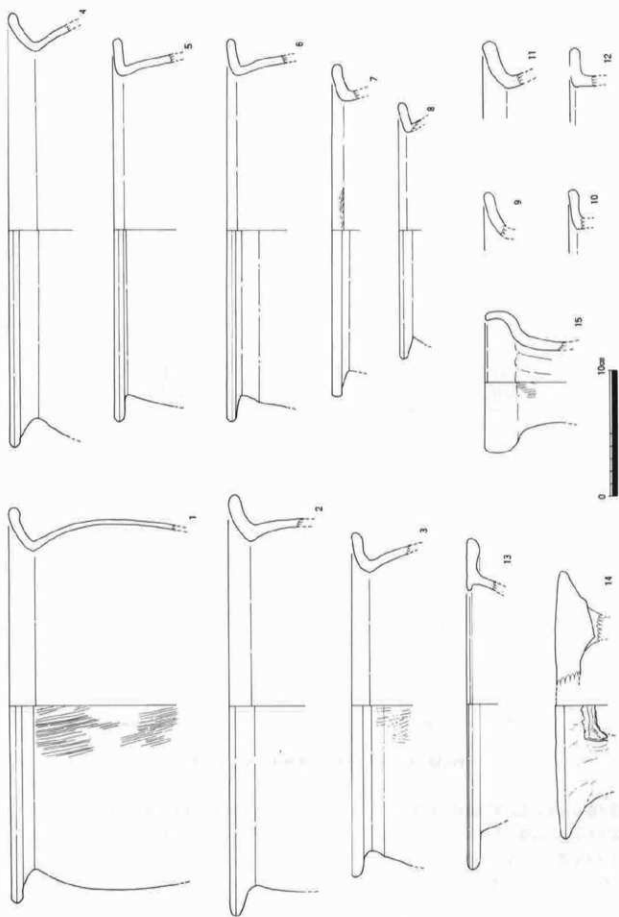


Fig.51 SX 0 5 II層出土遺物1 (S=1/3)

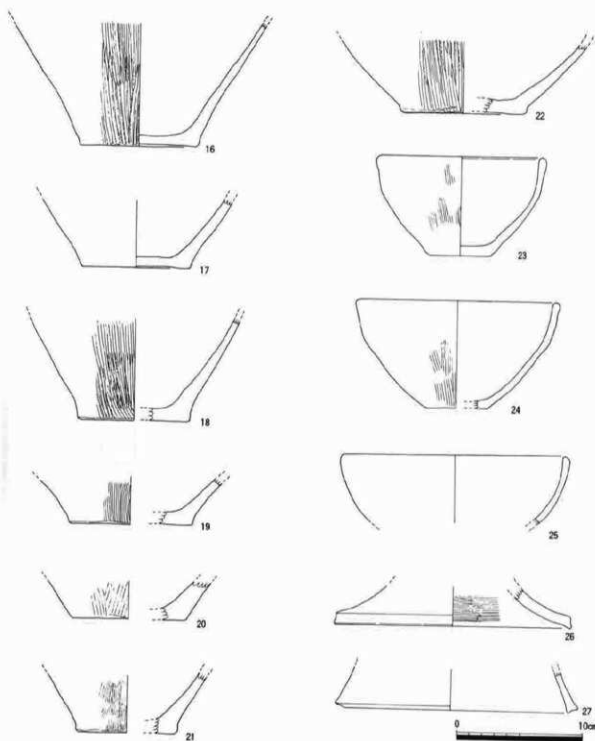


Fig.52 SX05Ⅱ層出土遺物2 (S=1/3)

部は膨らんでいる。26は高杯の脚部である。鉢(23~25)はいずれも口縁部が垂直となるもので、平底である。25は他のものに比べ、丸みが強い。27は器台である。14は不明土製品である。復元した径は21cmを測る。上面はナデが施されており、平坦に作られている。軸部は透かし窓を外から切り込んで作り出している。透かし窓周辺の調整は粗いナデが施されている。軸部の内面も粗いナデが施されている。作業台もしくは回転台としての用途が考えられるが、周辺地域からの出土例がなく、断定するまでには至らない。

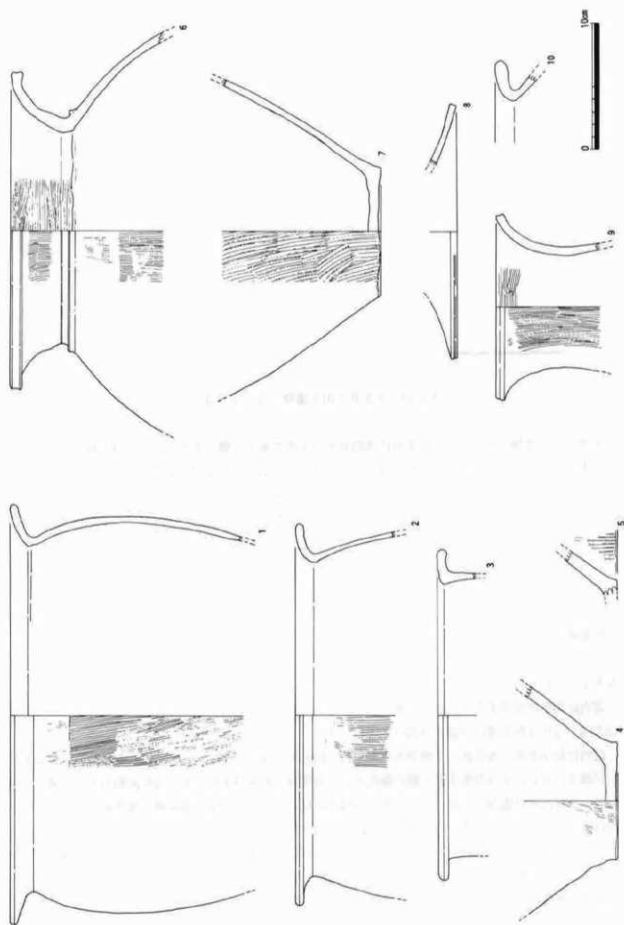


Fig.53 S X 5 Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 (S = 1 / 3)

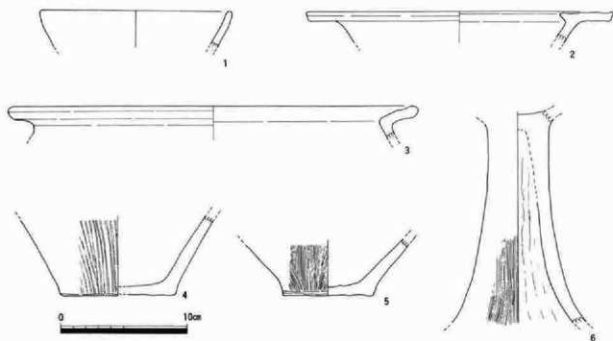


Fig.54 SX05出土遺物 (S=1/3)

Ⅲ層の出土遺物 (Fig.53-1~8) も弥生時代後期前半の土器である。甕 (1~5、7) は口縁部が「く」の字形に強く屈曲し、口縁端部はⅡ層のものより膨らまない。底部は平底で、器壁は薄い。表面はハケ目を施す。6は広口壺で、中期の様相を残す。8は高杯の脚部で、端部に面を作りだす。

Ⅳ層の出土遺物 (Fig.53-9・10) は器台と無頸壺がある。器台 (9) は胴部中位にくびれ部が位置する。短頸壺 (10) は口縁端部が肉厚となる。いずれも弥生中期後半に位置するものである。

SX05からはこの他に甕、高杯、鉢を出土した (Fig.54)。いずれも出土層位は不明だが、時期は弥生後期前半に位置するものと考えられる。

不明遺構

SX10 (Fig.55)

調査区東側に位置する不定形の土壌である。埋土は黒灰色粘土で、地山部分は青灰色粘土となる。おそらくは何らかの流路の溜まり部分と思われる。

遺物は弥生土器、須恵器、土師器を出土した (Fig.56)。弥生土器、土師器は磨滅が激しく、良好な状態ではない。1は弥生土器の甕の胴部で、三角突帯に刻み目を有する。弥生前期のものと考えられる。2は高杯の脚部で、部分的に丹塗りの痕跡が見られる。3は須恵器の甕の胴部破片である。外面は格子タタキが見られる。内面は上半に縦方向の平行紋、下方に同心円紋が見られる。時期は特定できない。土師器はいずれも小破片の出土であり、器種には碗 (4)、杯 (5~9)、高台付碗 (10) がある。時期は碗は不明であるが、杯、高台付碗は9世紀初頭に位置する。

遺構の築造時期は土師器と同じく9世紀初頭と考えられる。

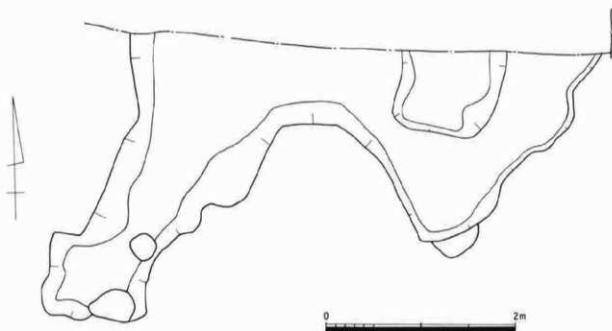


Fig.55 SX10 (S = 1 / 40)

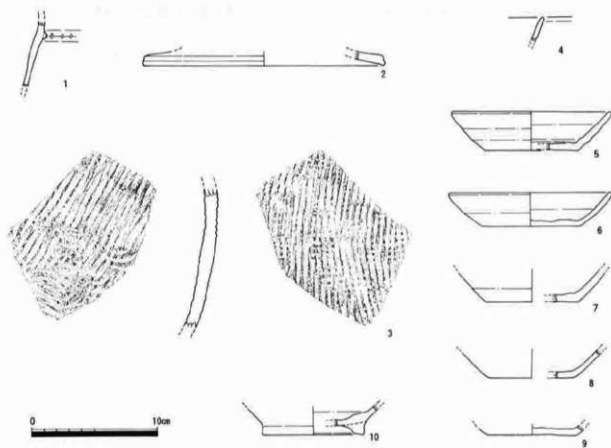


Fig.56 SX10出土遺物 (S = 1 / 3)

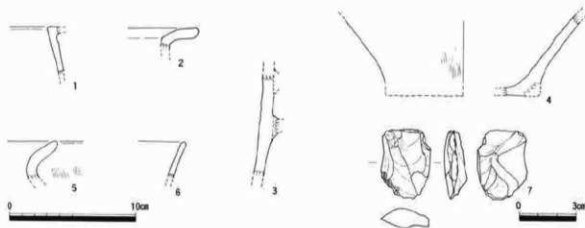


Fig.57 その他の出土遺物 (S=1/3, 1/2)

その他の出土遺物

1はR12、S12グリットに位置するSK17から出土した弥生土器で、時期は後期前半に位置する。

2はM12グリットに位置するSP23から出土した弥生土器の甕の口縁部で、後期前半から中葉にかけてのものである。

3～6は調査区の覆土中から出土した。3は弥生土器の甕の胴部破片である。時期の特定はできない。4は弥生土器の甕の底部で、後期前半に位置する。

5は土師器の甕の口縁部で、7世紀の中頃のものと思われる。

6は灰釉陶器の椀の口縁部である。細片の為時期の特定はできない。

7は調査区南側を西流する旧水路から採集されたサスカイトの剥片である。

4 小結

1 周溝状遺構について

周溝状遺構の調査は筑後市においてもすでに23例の報告があり、その数は増加している。現在調査されたものは未報告のものも含めると63例にのぼっている（Fig.58、表参照）。

整理されたものだけで見ると、遺物を伴うものは全体の半数近くあり、その多くが弥生時代後期前半に属する。土器の出土量はあまり多くはなく、日常的な遺物のほうが祭祀的な物よりも多い。今回調査したSX05についても遺物の出土量こそ多いが、その内訳は他と同様で、図化した43点のうち、祭祀的なものは丹塗の高杯破片3点と不明土製品1点のみである（全体の9%弱）。

遺構は一度、掘りなおされてはいるが、いずれの時点でも自然流入土による埋没であり、人為的なものは認められない。掘り直しが行われているものとして、他に田佛遺跡の2号周溝状遺構が挙げられる。これらは周溝状遺構での祭祀が数回に及ぶことがあることを示している。

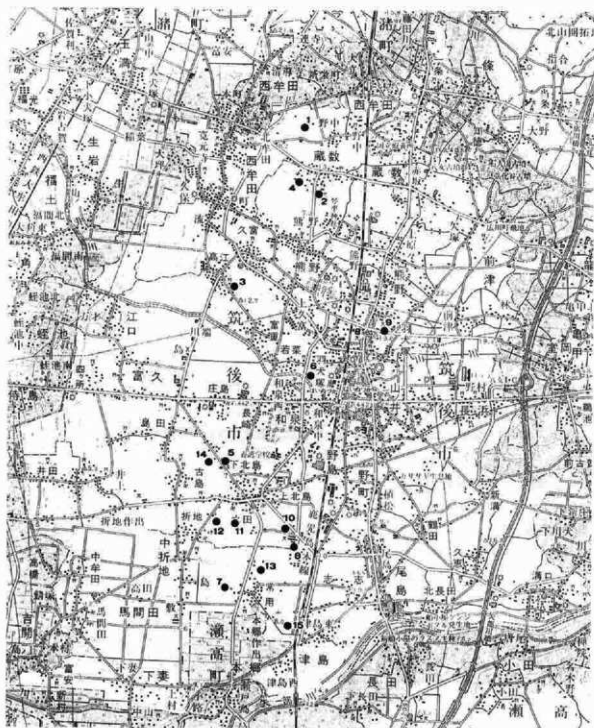
周溝状遺構からの出土遺物は前述のように弥生時代後期前半のものである。中期後半の袋口緑塗の破片1点が出土しているが、筑後地域においては中期後半の要素をもった土器が後期初頭にも見られるということなので、時期決定において問題視する必要はなさそうである。不明土製品については回転台、もしくは作業台としているが、一部分のみの出土のため使用痕などの観察はできなかった。類似品の報告例が近畿地方においてあるらしいが、今回の報告において実物および報告書にあたる機会を得ることができなかった。この遺物については次の機会に改めて考察を行いたい。

2 周辺遺跡との関連性について

周溝状遺構は集落との関連性が強く、その近くには同時期の住居が存在する。しかし今回の調査では同時期の住居址を確認するには至らなかった。当遺跡の東側に位置する津島皿ヶ町遺跡では弥生後期から古墳時代初頭にかけての遺構が確認されているが、やはり住居址の確認には至らなかった。周辺遺跡の調査は全てトレンチ状の調査区設定であり、今後のデータの増加が待たれるところである。

〈参考文献〉

- 田述 昭人 『田佛遺跡』 筑後市教育委員会 1988
佐々木 隆彦 『蘇敷遺跡群』 筑後市教育委員会 1990
永見 秀徳 他 『高江遺跡』 筑後市教育委員会 1991
筑後市教育委員会 編 『羽大塚耐堀ノ本』 筑後市教育委員会 1995
片岡 宏二 『周溝状遺構の再検討』 『福岡考古』 14～17 1989～96
小林 勇作 『ちくご遺跡だより』 第4号 筑後市教育委員会 1998



- | | | | |
|---------------|--------------|------------|-------------|
| 1 田佛遺跡 | 2 藏敷森ノ木遺跡1次 | 3 高江遺跡 | 4 藏敷坂口遺跡 |
| 5 下北島久清遺跡 | 6 若菜森坊遺跡 | 7 梅島遺跡2次 | 8 水田山伏遺跡1次 |
| 9 羽犬塚耐場ノ木遺跡1次 | 10 水田杉ノ元遺跡1次 | 11 水田正次遺跡 | 12 水田伊勢ノ藤遺跡 |
| 13 常用北長田遺跡2次 | 14 古島櫻崎遺跡1次 | 15 津島北石伏遺跡 | |

Fig.58 筑後市内周溝状遺構調査位置図 (S = 1/50,000)

筑後市内周溝状遺構一覧表

遺 跡 名	調査年	遺構番号	形 状	法量 (m×m)	時 代	備 考	文 献
田原遺跡 1次	1987	1号	円形	2.5×3.0	弥生時代後期前半 弥生時代後期前半 弥生時代後期前半 弥生時代後期前半	豊後国日田士	『田原遺跡』筑後市教育委員会 1988
		2号	円形	4.3×5.3			
		3号	隅丸方形	6.42×6.5			
		4号	円形	4.38×4.15			
		5号	隅丸方形	7.5×7.2			
		6号	円形	3.5×3.3			
		7号	円形	2.2×2.2			
		8号	隅丸長方形	6.45×5.38			
藏敷森ノ木遺跡 1次	1988	1号	楕円形	(7.0)×(3.0)	弥生時代後期 弥生時代後期 弥生時代後期 弥生時代後期 弥生時代後期 弥生時代後期 弥生時代後期 弥生時代後期 弥生時代後期 弥生時代後期 弥生時代後期 弥生時代後期		『藏敷遺跡群』筑後市教育委員会 1990
		2号	長方形	3.0×7.5			
		3号	隅丸長方形	4.85×4.0			
		4号	—	—×—			
		5号	不正円	3.4×3.4			
		6号	円形	3.2×3.2			
		7号	楕円形	4.86×3.65			
		8号	—	2.8×—			
		10号	円形	3.8×3.5			
		11号	—	—×—			
		12号	—	—×—			
		13号	—	—×—			
高江遺跡 B区	1990	SX60	楕円形	5.5×4.6	弥生時代後期		『高江遺跡』筑後市教育委員会 1991
藏敷谷口遺跡	1990	51	隅丸方形	—×—			整理作業中
下北島久保遺跡	1991	70	楕円形	9.7×8.5			整理作業中
若菜森坊遺跡	1991	55	円形 円形	—×— 4.3×4.3			整理作業中
梅島遺跡 2次	1991	40	—	—×—	弥生時代後期 弥生時代後期 弥生時代後期 弥生時代後期 弥生時代後期 弥生時代後期 弥生時代後期 弥生時代後期 弥生時代後期 弥生時代後期 弥生時代後期 弥生時代後期 弥生時代後期	長軸内側へフランジ	整理作業中
		50	—	—×—			
		60	楕円形	6.8×5.0			
		313	—	—×—			
		420	隅丸方形	10.8×9.5			
		702	—	—×—			
		720	円形	7.8×7.0			
		750	隅丸方形	5.8×5.3			
		770	隅丸長方形	6.1×4.6			
		820	長方形	—×—			
		830	不正方形	—×—			
		930	不正方形	6.0×6.0			
		1000	不正長方形	15.0×6.4			
1168	不正長方形	(7.0)×3.5					
水田山伏遺跡 1次	1992	55	円形	2.8×2.8			整理作業中
岩犬塚射場ノ木遺跡 1次	1994	ISX010	円形	2.8×2.8			『岩犬塚射場ノ木』筑後市教育委員会 1995
水田村ノ元遺跡 1次	1996	195	楕円形	2.4×2.5			整理作業中
		215	隅丸方形	3.9×2.8			
		270	円形?	—×—			
水田正歌遺跡 D区	1996	100	楕円形	6.3×—		土器集中調査アリ	整理作業中
水田伊勢ノ脇遺跡	1997	30	円形	4.5×4.5			整理作業中
深川北長田遺跡 2次 (常南E区)	1997	371	隅丸方形	4.8×4.6			整理作業中
		309	楕円形	6.8×4.1			
古島磯崎遺跡 1次	1997	01	円形	4.1×—			整理作業中
		56	隅丸長方形	—×2.6			
		57	—	—×—			
		58	—	—×—			
		60	不正円	3.2×2.8			
		98	楕円形	6.7×4.7			
		103	円形	5.9×4.6			
		128	隅丸長方形	—×—			
		220	円形	4.5×4.5			
		274	—	—×—			
		310	楕円形	6.2×5.5			
		315	円形	3.9×2.8			
		475	円形	3.6×3.5			
485	楕円形	6.2×5.6					
津島北石伏遺跡	1997	SX05	円形	4.2×4.2	弥生時代後期前半	南西及び南東に土器を集中 集積、割置しが認められる	今回報告分

注 1：法量は外縁で最大径×最小径を記載した。

2：整理作業中の遺跡については遺構のみを縮小し、掲載した。遺構番号については現状に番号であり、本報告時に変更される。

3：梅島遺跡については可能性のあるものについては全て記載した。

4：整理作業中の遺跡については近年中に報告書を刊行する予定である。

第4章 考 察

考 察

1. 周辺遺跡の状況

筑後市南部では、近年圃場整備事業が相次いで実施され、それに伴う民間、公共の開発も盛んに行われている。これに連動するように、文化財の緊急発掘調査も増加し、余り知られていなかった筑後市域の矢部川北岸の状況が、少しずつ知られるようになってきた。ここではそれらを踏まえ、先史時代の人々の動きを追ってゆきたいと思う。なお、ここに紹介する遺跡の大部分が整理作業中のものであり、近年中に報告書を刊行される予定であることを了承いただきたい。

1) 先土器時代

この時期の遺物として、細石刃が数点採集されている。分布状況はまばらであり、遺跡内ではなく周辺からの表採である。担当者の中には細石刃として否定的な見方もあり、もう少し検討が必要である。

2) 縄文早期

この地域での縄文早期の遺跡としては、古くから裏山遺跡が有名であるが、近年の調査により市の東南部から南部にかけての鶴田・尾島・志地域にかけてから、多くの押型文土器が採集されている。押型文土器の多くは大型の楕円文が施されており、田村式の段階に位置するものと考えられている。数は少ないが、山形文を施されたもの、小型の楕円文を施されたものなども見ることができる。いずれの遺跡でも、包含層からの出土であり、層位的な発掘は行われてはいない。

包含層からは、熱を受けた円鏝も多く見つかった。後世の開墾、耕作により、元位置を動いたものも多いが、鶴田地区、志地区からは、良好な状態で石組みがみつかっている。内部からは炭化物などは確認されていない。周辺の土器の分布状況から、この遺構は縄文早期のものであると考えられる。

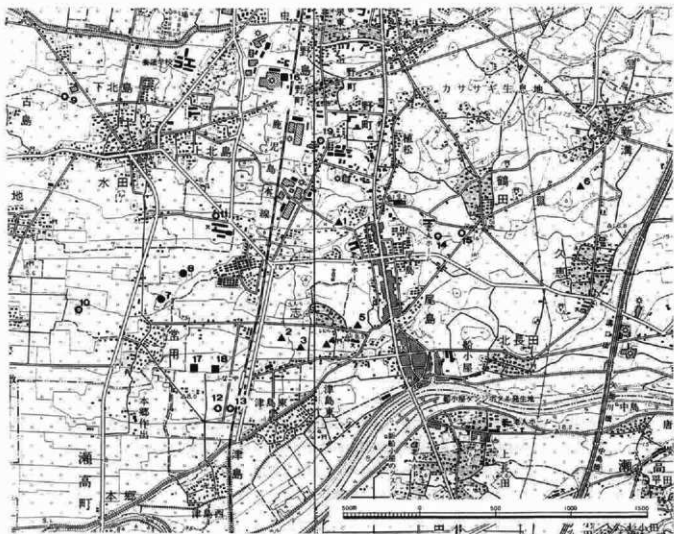
3) 縄文前期～縄文後期

該当時期の遺跡は、現在のところ明確には見つかっていない。ただ市の中央部、長崎地区の坊田遺跡において曾畑式平行期の土器片が見つかっており、今後市の南部地域からも発見される可能性を残している。

4) 縄文晩期～弥生中期

この地域では、この頃から明確な集落遺跡を見ることができる。常用地区の低位段丘上には集落が営まれおり、常用北長田遺跡、常用日田行遺跡などを中心として展開する。出土土器は、夜臼式、板付Ⅱ式、龜ノ甲タイプ、城の越式を見ることができる。

市内においては現在、該当時期の唯一の大規模集落である。



▲ … 縄文時代早期

- 1 裏山遺跡 2 志西田遺跡 3 志西野々遺跡 4 志前田遺跡
5 尾島東端計遺跡 6 新湊丸田遺跡

● … 縄文時代晩期～弥生時代前期

- 7 常用北長田遺跡 8 常用日田行遺跡

○ … 弥生時代中期～後期

- 9 古島榎崎遺跡 10 橋島遺跡 11 水田杉ノ下遺跡 12 津高北石伏遺跡
13 津高畑ノ町遺跡 14 鶴田岸部遺跡第1次調査区 15 鶴田岸部遺跡第2次調査区
16 上北島平塚遺跡

■ … 弥生時代終末～古墳時代初頭

- 16 狐塚遺跡 17 津島南佛生遺跡第2次調査区 18 津島南笹原遺跡

Fig.59 筑後市南部時代別遺跡分布図 (S = 1 / 25,000)

5) 弥生中期～弥生後期

この頃には集落は古島・水田・常用・津島・上北島・下北島地区へと展開する。この辺りの中心的な集落は、基本的に西に移ったと見られる。上北島地区の上北島平塚遺跡では、廃棄土壌群からは板付式土器と亀ノ甲タイプの土器が出土している。板付式土器は器形が崩れ、城ノ越式土器に近い器形をもつ。円形住居からは城ノ越式土器を出土している。常用地区に位置する梅島遺跡は、常用北長田、常用日田行遺跡の西に位置している。1次調査では不明確だった全体像は、次年度に行われた2次調査によって、中期から後期後半に続く集落遺跡であることが判った。また、北西に位置する古島榎崎遺跡も同時期の遺跡で、数多くの竪穴式住居、掘立柱建物、周溝状遺構が見つかる。裏山遺跡の弥生住居もこの時期のものである。一方、水田、津島地区の集落は、調査が水路、道路などトレンチ的な線状の調査でしかなく、詳しい事は不明である。

現在のところ、該当時期の大型集落は、北から歳数森ノ木遺跡、古島榎崎遺跡、梅島遺跡の3ヶ所である。

6) 弥生終末～古墳時代初め

この時期の集落は上北島にある狐塚遺跡が著名であるが、これより南となると集落としてはっきりと確認できるものは見当たらない。今回報告された津島南佛生遺跡、津島南笹原遺跡は狐塚遺跡とは距離が離れており、もう少し近くにこれらと対応させる事のできる遺跡が存在すると考えられる。なお、JR船小屋駅の西に位置する津島皿ヶ町遺跡の溝状遺構からは庄内・布留式併行期の土器が出土したが、他の多くの遺構は須玖Ⅱ式～高三瀬式に該当しており、これを該当時期の集落とは言えない。

2. 各遺跡の概要

このように、この地域では、縄文晩期から弥生前期の常用北長田・日田行の両遺跡を中心とし、弥生時代中期～後期にかけて、遺跡が周辺へと広がっていく動きが見られる。次に今回報告の遺跡に関連の深いと思われる幾つかの遺跡について、概略を述べてゆく。

1) 梅島遺跡

梅島遺跡は大字常用字梅島に所在し、県営干拓地等農地整備事業（筑後西部地区）に伴い、平成2年度から3年度にかけて調査が行われた。

1次調査は、1990年12月から翌1991年1月にかけて、筑後川からの導水管を埋設する部分において行われた。竹林など後世の攪乱を多く受けていたらしく、また、遺構の性格も不明な点が多かったようである。主要遺構は弥生時代中期から後期、そして中世（13～16世紀）のものである。

2次調査は1991年12月から翌1992年4月にわたり、圃場整備による掘削を受ける部分について行われた。調査区は1次調査区を挟み込むような形となり、中世の遺構では同一のものを検出している。

広大な面積を対象とした調査であったが、検出時に住居跡と確認できたものではなく、方形の遺構も内部に柱穴を伴わないなど、集落としての性格は不明瞭である。しかしながら、周溝状遺構が確認されていることから、近くに住居跡があることは確かである。

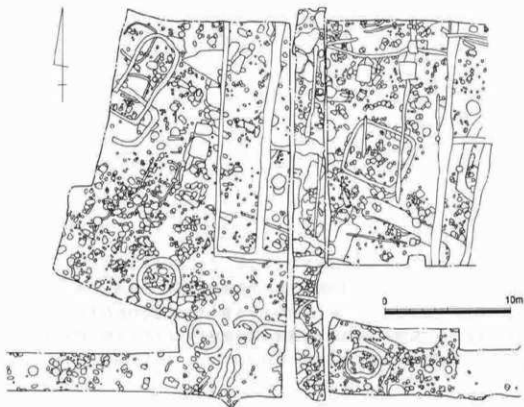


Fig.60 梅島遺跡主要部分概略図 (S = 1 / 300)

2) 津島皿ヶ町遺跡

津島皿ヶ町遺跡はJR船小屋駅の西側に位置する。更にその西側には津島北石伏遺跡が位置する。調査は県営担い手育成事業筑後西部第2地区の第23号支線排水路の建設に伴い、1997年9月から10月にかけて行われた。調査面積は218㎡である。

遺構面は現状の地表面から約80cmほどの深さにある。主な遺構はその出土遺物から、弥生時代中期後半から古墳時代初頭に位置すると思われる。

弥生時代中期後半から後期前半の遺構としては、掘立柱建物跡1棟、廃棄土壇2基が確認された。特に掘立柱建物跡の柱穴1基からは、柱根が出土している。柱根は、断面が蒲鉾状の杵型の礎板と組み合わされている。類例は同時期のものが佐賀平野を中心に認められる。

弥生時代終末から古墳時代初頭の遺構としては溝状遺構1条が確認されている。

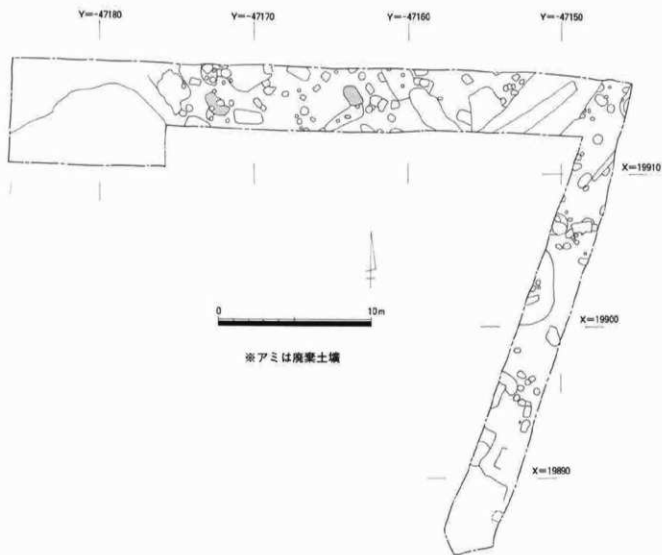


Fig.61 津島皿ヶ町遺跡遺構概略図 (S = 1 / 250)

3. 結語

このように、今回報告された4遺跡のうち、津島北石伏遺跡については、周囲に同時期の遺跡が存在する。津島皿ヶ町遺跡との間は谷地形となり、遺構の確認はされていないが、同一の集落である可能性が高い。

一方、津島南佛生遺跡第2次調査、津島南笹原遺跡に関しては、津島皿ヶ町遺跡の溝状遺構から、同時期の遺物が出土している。今回の調査はいずれもトレンチ状の調査のため、皿ヶ町遺跡のこの溝がどのような意味を持つのかまでは判明しえなかった。が、3遺跡から出土した弥生時代終末期の遺物は、いずれも狐塚Ⅱ式後半以降の時期が与えられる。また、南佛生第2次調査地点・南笹原遺跡出土の遺物の大半は、狐塚Ⅲ式に続くものであると考えられる。

〈参考文献〉

- 岩崎 光 『真山遺跡』 筑後市教育委員会 1966
小田 富士雄 『狐塚遺跡』 筑後市教育委員会 1970
川添 昭人 『磯敷遺跡群』 筑後市教育委員会 1990
永見 秀雄 『梅島遺跡』 筑後市教育委員会 1992
筑後市教育委員会 編 『筑後東部地区遺跡群Ⅰ』 1994
筑後市教育委員会 編 『筑後東部地区遺跡群Ⅱ』 1995
小林 勇作 『ちくご遺跡だより』 第4号 筑後市教育委員会 1988
永見 秀雄 『ちくご遺跡だより』 第5号 筑後市教育委員会 1988
小林 勇作 『長崎坊田遺跡』 筑後市教育委員会 1999

長崎坊田遺跡

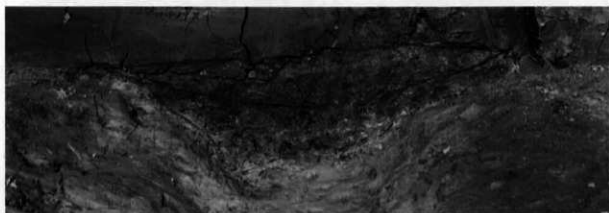
図 版



津島遺跡群 全景 (南から)



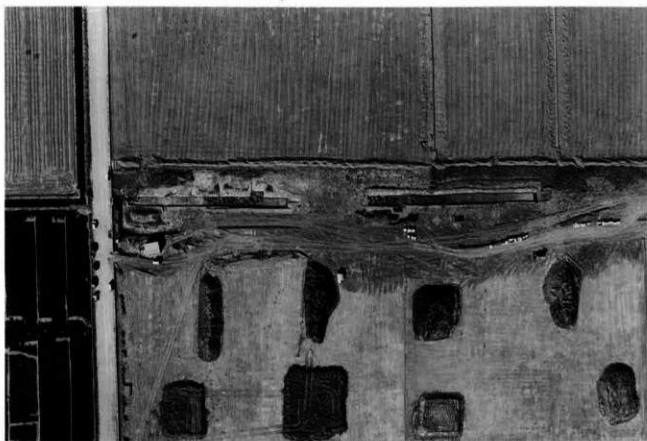
津島南佛生遺跡 第1次調査全景 (西から)



SD1土層断面 (西から)



SD1土層断面 (北から)



津島南佛生遺跡 第2次調査、津島南笹原遺跡 全景(上から)



津島南佛生遺跡 第2次調査、西側調査区(北から)



SD103 完掘状況 (北東から)



SX106 完掘状況 (東から)



津島南佛生遺跡 第2次調査、東側部分調査区 (上中・5)



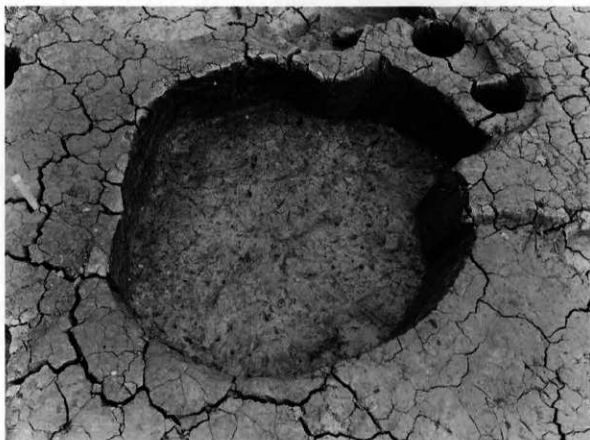
津島南佛生遺跡 第2次調査、庭集土掘削 (上中・5)



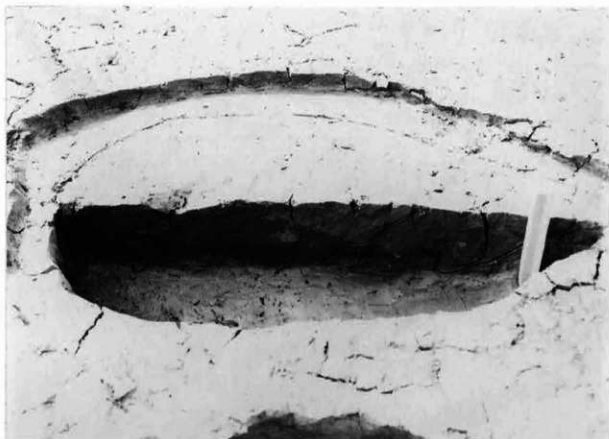
SK002 完備状況 (北中・5)



SK004・014・027・043 完掘状況(南東から)



SK007 完掘状況(南から)



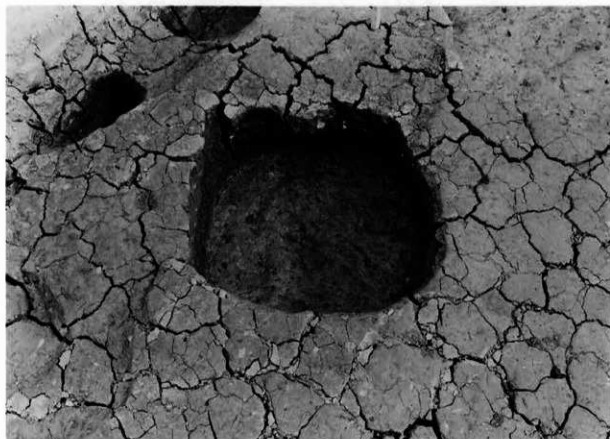
SK006 土層断面 (北から)



SK006 完畢状況 (北から)



SK011 土層断面 (西から)



SK011 完掘状況 (南西から)



SK012 土層断面 (東から)



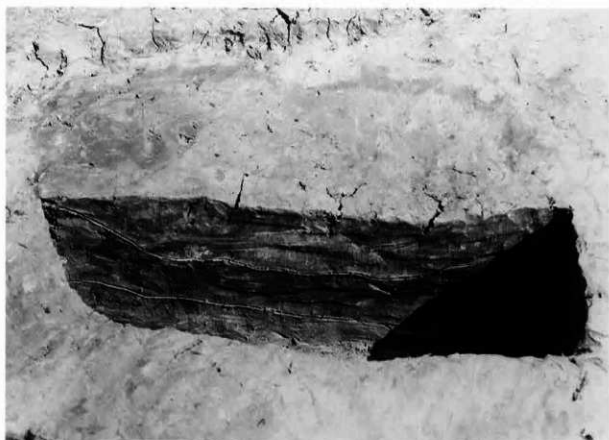
SK012 発掘状況 (北から)



SK013 土層断面 (東から)



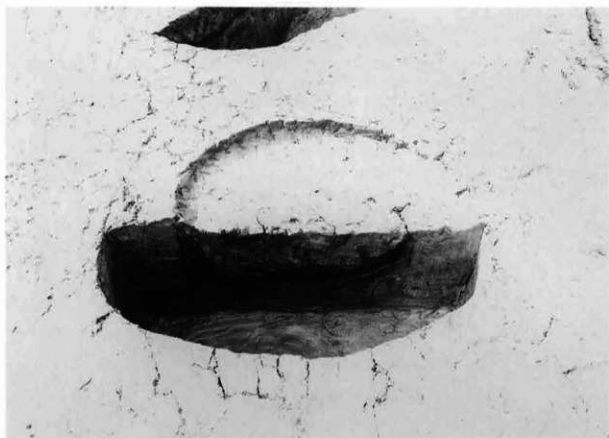
SK013・034 完掘状況 (北から)



SK014 土層断面 (西から)



SK014・043 完掘状況 (南から)



SK016 土層断面 (東から)



SK016 完掘状況 (南東から)



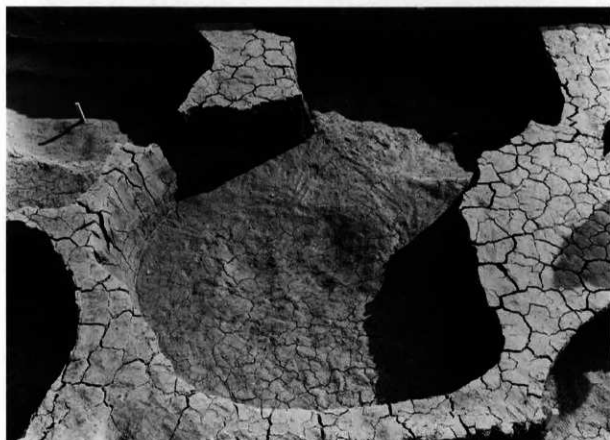
SK017 遺物出土状況(東から)



SK017 完掘状況(北東から)



SK015 土層断面 (北から)



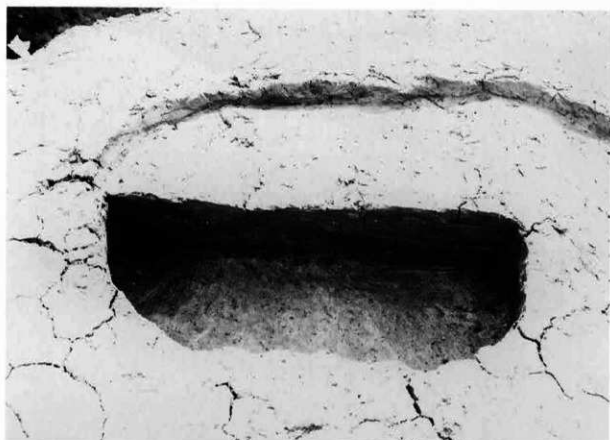
SK018 完結状況 (北から)



SK015 土層断面 (北から)



SK018 完場状況 (北から)



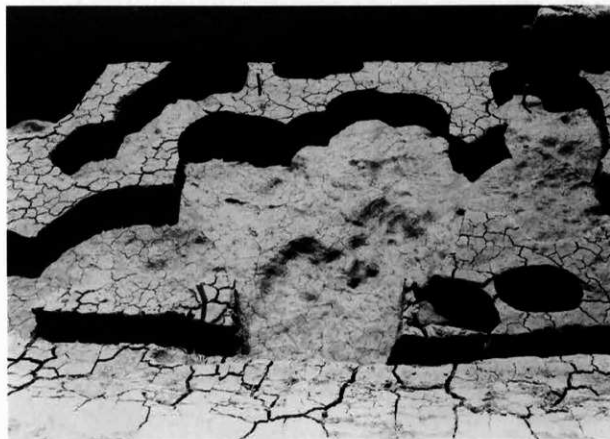
SK019 土層断面 (北から)



SK020 土層断面 (北から)



SK021 土層断面 (北西から)



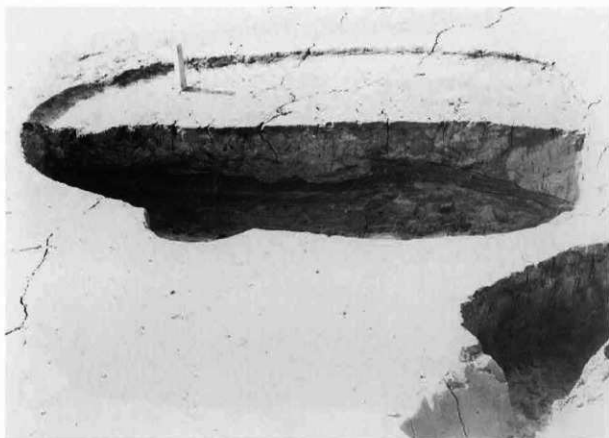
SK019・020・021 完備状況 (北から)



SK023 遺物出土状況 (北西から)



SK023 完相状況 (北西から)



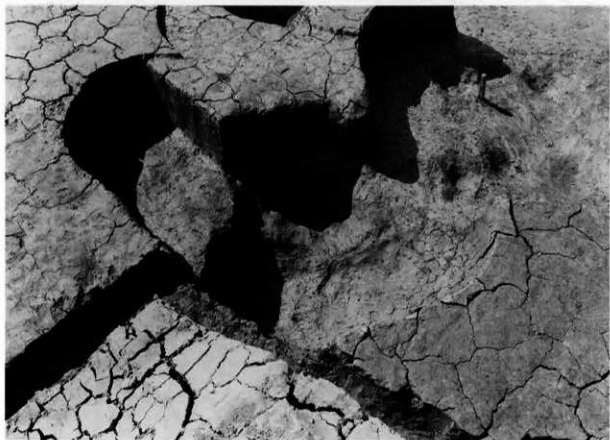
SK022 土層断面 (北東から)



SK028・029・030・040 完掘状況 (北から)



SK024 土層断面 (北から)



SK024 完結状況 (北東から)



SK035 完熟状況 (東から)



SK036 完熟状況 (南から)



Fig. 11-1

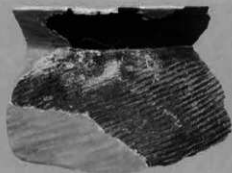


Fig. 14-1



Fig. 11-5



Fig. 14-3



Fig. 11-6



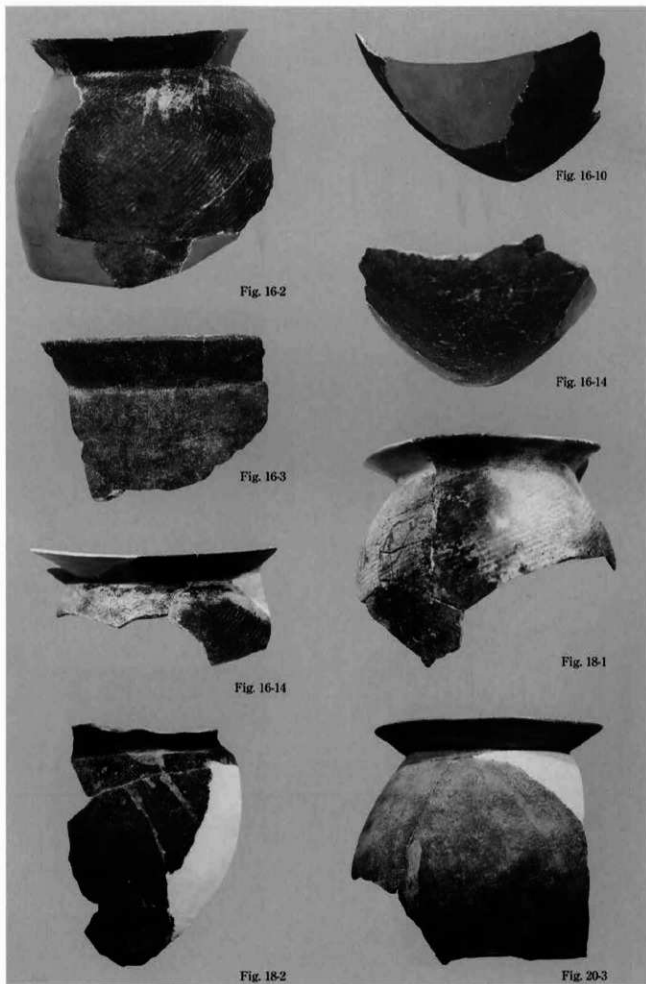
Fig. 14-4



Fig. 11-7



Fig. 16-1



廢棄土壩出土遺物 (2)



Fig. 20-5



Fig. 22-6

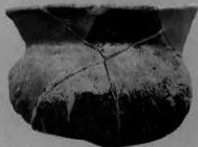


Fig. 23-3



Fig. 26-1



Fig. 26-5

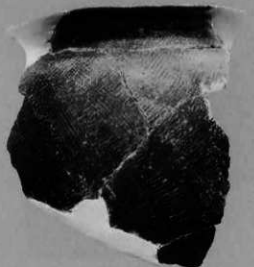


Fig. 24-4



Fig. 28-1



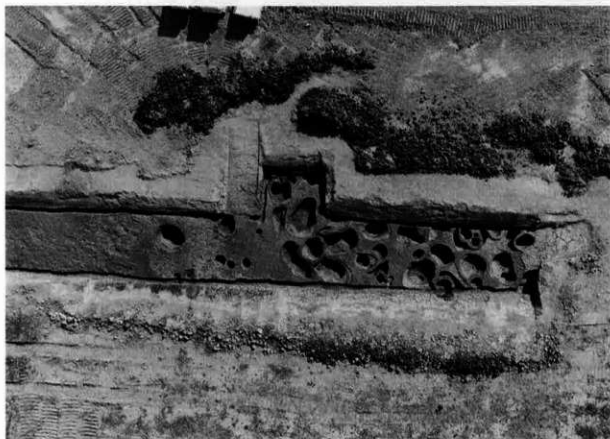
Fig. 28-4
廃棄土壌出土遺物 (4)



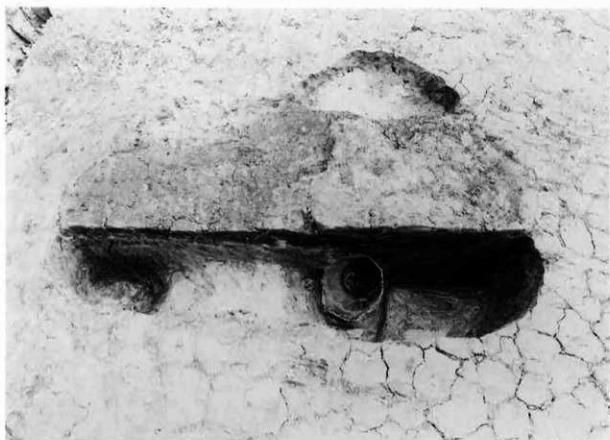
Fig. 31-6
その他の出土遺物



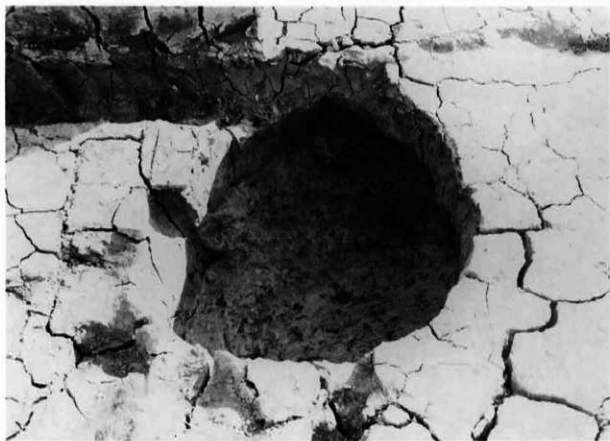
津島南笹原遺跡 全景 (西から)



津島南笹原遺跡 廃棄土壙群 (上から)



SK001 遺物出土状況 (西から)



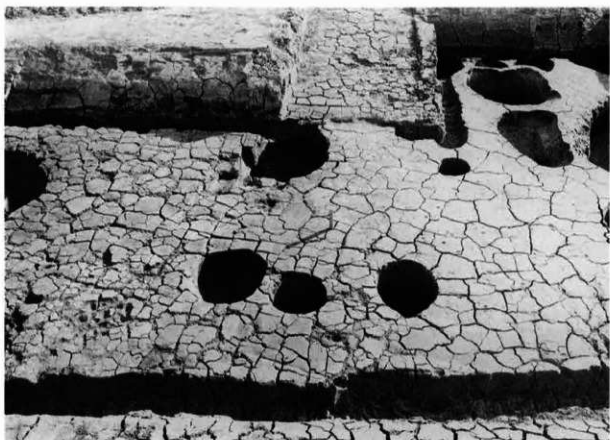
SK002 完備状況 (北から)



SK003 土層断面 (北から)



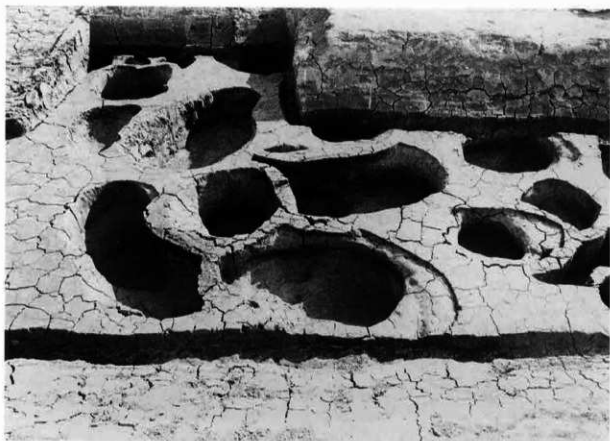
SK003 完果状況 (北から)



SP005 完備状況 (北から)



SP005 遺物出土状況 (南から)



廃棄土壌群 1 (北から)



廃棄土壌群 2 (北から)



廃棄土壙群 3 (北から)



廃棄土壙群 4 (北西から)

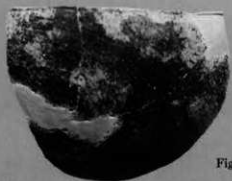


Fig. 34-2



Fig. 36



Fig. 37-1



Fig. 37-3

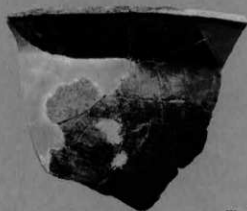


Fig. 39-1



Fig. 39-2



Fig. 39-3

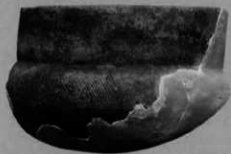


Fig. 41-3



Fig. 41-4

廃棄土壙出土遺物 (2)



SP005 出土遺物

Fig. 44



津島北石伏遺跡 全景 (東から)



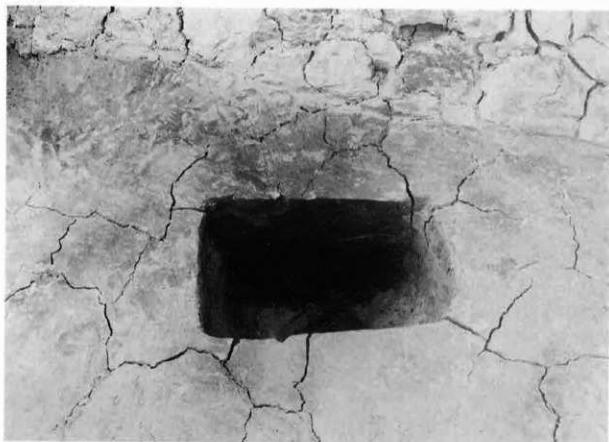
SC01 完掘状況 (南東から)



SB02 完掘状況 (南西から)



SX05 完掘状況 (南西から)



SB02 土層断面 (P11.南から)



SB02 土層断面 (P12.南から)



SB02 土層断面 (P15.北から)



SB02 土層断面 (P16.北から)



SX05 北側土層断面 (西から)



SX05 西側土層断面 (南から)



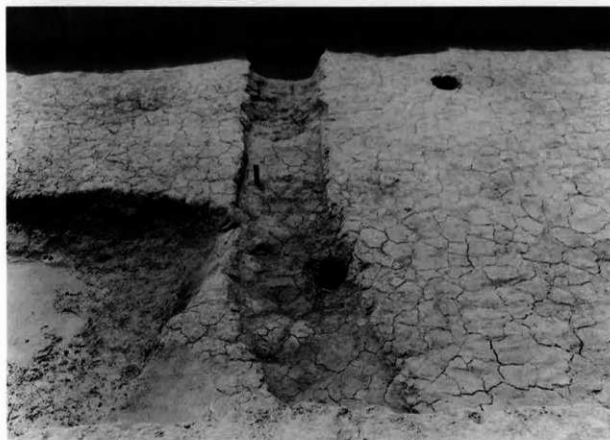
SX05 南側土層断面(西から)



SX05 東側土層断面(南から)



SX10 完掘状況(南東から)



SD20 完掘状況(北から)

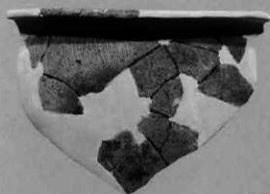


Fig. 20-5



Fig. 22-6



Fig. 22-3



Fig. 26-1



Fig. 26-5



Fig. 26-1

SX05 II 層出土遺物



Fig. 24-4



Fig. 28-1

SX05 III 層出土遺物 (1)



Fig. 53-6
SX05 III層出土遺物 (2)



Fig. 53-7



SX05 IV層出土遺物



Fig. 54-6

SX05 出土遺物



Fig. 56-6



Fig. 56-5

SX10 出土遺物

筑後西部第2地区遺跡群
筑後市文化財調査報告書 第21集
平成11年3月31日

発行 筑後市教育委員会
筑後市大字山ノ井898
印刷 瞬報社写真印刷株式会社
福岡市中央区天神5丁目4-16